

平安京左京四条二坊十五町跡・ 本能寺城跡発掘調査報告書

2 0 2 2

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市中京区西洞院通六角下る池須町 415 他で実施した、平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡の発掘調査報告書である。(京都市番号 21H221)
- 2 調査は、株式会社今井建設より、株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され実施した。現地調査は菅田 薫、早見由槻が担当した。
- 3 調査期間は、令和 3 年 10 月 11 日～令和 3 年 11 月 29 日である。
- 4 調査面積は、200 m²である。
- 5 図 1・5 で使用した地図は京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2500）「壬生」を調整して作成した。
- 6 本文・図中の方位・座標は世界測地系平面直角座標系第Ⅵ系による。標高は、T.P.（東京湾平均海面高度）である。
- 7 土層名及び出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は、第 4 章を早見と菅田が、他を菅田が行い、編集は菅田・野地ますみが行った。
- 9 遺跡の写真撮影は調査担当者が行った。出土遺物の撮影は図版 10－1 を神野いくみが、他は写真楠華堂に依頼した。
- 10 出土木材などの自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 11 調査に係る資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査及び整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 上田智也 清州慶太 小林一浩 田中慎一 中 優作 望月麻佑 吉岡創平
作業員 株式会社京カンリ 資機材リース 株式会社 Soid 重機 株式会社一誠建設
〔整理作業〕 赤羽 香 上野恵美 内牧明彦 甲田春奈 塩地宏行 多賀摩耶
場勝由紀菜 松井 彩 溝川珠樹 望月麻佑 森下直子 吉川絵里
若山美帆
遺物洗浄 株式会社ア・ビュー

- 13 出土遺物の年代観は、主に下記の文献に依った。
平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要』第 12 号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 年
- 14 現地調査・整理作業において、下記の方々にご教示をいただいた。記して感謝いたします。
(敬称略)

石川祐一（京都市文化財保護課）、國下多美樹（龍谷大学）、来本雅之（京都市元離宮二条城事務所）、鈴木久男（京都産業大学）、鶴岡典慶（京都女子大学）、浜中邦弘（同志社大学歴史資料館）、原戸喜代理（京都市文化財保護）、村田典彦（京都府教育庁文化財保護課）、吉川義彦（関西文化財調査会）、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過	1

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	5

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	9
2 検出遺構	9
(1) 第4面	9
(2) 第3面	19
(3) 第2面	19
(4) 第1面	22
3 出土遺物	23
(1) 遺物の概要	23
(2) 出土遺物	23

第Ⅳ章 まとめ 31

附章	平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡の自然科学分析	34
	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	

図版目次

図版1	遺構	1. 第1面西(垂直写真)	2. 第1面東(垂直写真)
図版2	遺構	1. 第2面西(垂直写真)	2. 第2面東(垂直写真)
図版3	遺構	1. 第3面西(垂直写真)	2. 第3面東(垂直写真)
図版4	遺構	1. 第4面西(垂直写真)	2. 第4面東(垂直写真)
図版5	遺構	1. 第1面 溝98・137 枿89(北から)	
		2. 第1面 溝98・137・枿89(西から)	
		3. 第1面 溝98・137・枿89 蓋石除去後(西から)	

図版 6	遺構	1. 第2面 溝102・107（北から）	2. 第2面 溝102・107（東から）
		3. 第2面 土坑95・112（北から）	
図版 7	遺構	1. 第3面 井戸127（南から）	2. 第3面 井戸127断割（南から）
図版 8	遺構	1. 第4面 土坑70（南から）	2. 第4面 溝77 北壁断面（南から）
図版 9	遺構	1. 第4面 溝111 木舞検出状況（北から）	
		2. 第4面 溝111 西肩断面（南から）	
		3. 第4面 溝111 東肩断面（南から）	
		4. 第4面 溝111 南北断面（東から）	
図版10	遺物	1. 出土遺物 1 土坑70	
		2. 出土遺物 2 溝77	
図版11	遺物	1. 出土遺物 3 溝111	
		2. 出土遺物 4 土坑117 51側面1	
		3. 出土遺物 5 土坑117 51側面2	
		4. 出土遺物 6 土坑117	
図版12	遺物	1. 出土遺物 7 溝102	
		2. 出土遺物 8 土坑88	
図版13	遺物	1. 出土遺物 9 第1面検出中	
		2. 出土遺物10 溝77	
		3. 出土遺物11 土坑123	
		4. 出土遺物12 土坑123	
		5. 出土遺物13 土坑123	
		6. 出土遺物14 土坑117	

挿図目次

図 1	調査地位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区地区割り・基準点配置図（1：200）	3
図 3	発掘調査経過写真	4
図 4	調査地位置図・平安京条坊（1：80,000）	5
図 5	既往調査位置図（1：5,000）	6
図 6	調査区北側断面図（1：80）	10
図 7	西壁・東壁・溝77南壁断面図（1：80）	11
図 8	第4・3面平面図（1：150）	12
図 9	第4面遺構実測図（1：150）	13
図10	木舞状木製品詳細図（1：40）	14
図11	溝111南北断面図（1：80）	15
図12	土坑70平面・断面図（1：20）	15

図13	井戸127平面・断面図（1：40）	16
図14	第2・1面平面（1：150）	17
図15	土坑95・112・104平面・断面図（1：40）	18
図16	溝102平面・断面図（1：40）	19
図17	第1面遺構実測図（1：100）	20
図18	溝98・137、枿89平面・立面・断面図（1：40）	21
図19	出土遺物1（1：4）	24
図20	出土遺物2（1：4、1：2）	25
図21	出土遺物3（1：4）	27
図22	左京四条二坊十五町遺構概略図（1：1,000）	31

表目次

表1	既往調査一覧表	7
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	23
表4	出土遺物観察表	29

第Ⅰ章 発掘調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯（図1）

調査地は、京都市中京区西洞院通六角下る池須町 415 番地他である。当該地は平安京左京四条二坊十五町跡にあたり、また戦国時代末の本能寺・本能寺城跡に推定される場所である。この本能寺城跡は京都市の埋蔵文化財包蔵地の中でも重要遺跡に指定されている。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）は建設工事に先立ち発掘調査を指導した。この指導を受け原因者である株式会社今井建設から委託を受け株式会社文化財サービスが発掘調査を実施した。

2 発掘調査の経過（図2）

調査は、2021 年 10 月 11 日から現地作業に着手し、11 月 29 日にすべての現地作業の工程を終了した。

調査は文化財保護課からの指導に基づき建設計画予定範囲のうち、200 m²の調査区を設定した。敷地は東西に細長く面積も狭いことから、反転調査を行うこととし、重機の搬出入を考慮して西側から先行して調査を行った。また既設の建物は染色工場で貯水槽などの基礎が比較的強固に深く作られており、それらの基礎を撤去することにより遺構面が破壊される可能性があったため、



図1 調査地位置図（1：2,500）

コンクリート基礎は撤去せずに調査を行った。

敷地北側に隣接する 2007 年の調査（図 5・表 1）を参考に、現代整地土を重機によって除去しその後人力により第 1 面の精査及び遺構検出を行った。既往の調査成果から遺構面は 5 面を想定して調査に入ったが、江戸時代後期から現代攪乱の第 1 面、江戸時代の第 2 面、江戸時代から室町時代を第 3 面、室町時代前期を第 4 面として 4 面の調査を行った。

調査全般を通じて各遺構面での遺構検出や完掘時に文化財保護課の検査を受けた。また検証審査員として同志社大学歴史資料館准教授浜中邦弘氏、龍谷大学教授國下多美樹氏、京都産業大学教授鈴木久男氏に現地視察と検証をしていただき、調査に対する適切なお指導をいただいた。

測量基準点の設置と地区割り（図 3・4）

測量基準点は、VRS 測量により調査区の東側に T. 1 を、西側に T. 2 を設定し、ほかに TS 観測により T. 3、T. 4 を設置した。基準点測量の成果は、以下のとおりである。

T. 1	X=-110,174.274m	Y=-22,352.860m	H=35.766m
T. 2	X=-110,173.710m	Y=-22,365.591m	H=35.797m
T. 3	X=-110,165.516 m	Y=-22,380.029m	H=35.938m
T. 4	X=-110,166.466m	Y=-22,356.309m	H=36.004m

検出した遺構実測および遺物取り上げの単位とするために、測量成果に基づき 3 m 四方のグリッドを設定した。

記録作業は、手測りによる実測と写真測量を併用し図面を作成した。写真は 35 mmフルサイズのデジタル一眼レフカメラ、35 mmモノクロフィルム・35 mmカラーリバーサルフィルムを使用し撮影した。

整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業及び報告書作成を行った。整理作業は、写真・図面の整理と出土遺物の整理を並行して行った。遺物の整理は、接合、実測、トレース、復元を行った後、報告書の執筆及び編集作業を行い、報告書を作成した。執筆は調査を担当した菅田・早見が行い、分担は例言に記した。編集作業は菅田・野地ますみが担当し、その他整理業務は当社社員が分担して行った。出土遺物の洗浄は株式会社ア・ビューに、遺物の写真撮影は大半を写房楠華堂に委託した。

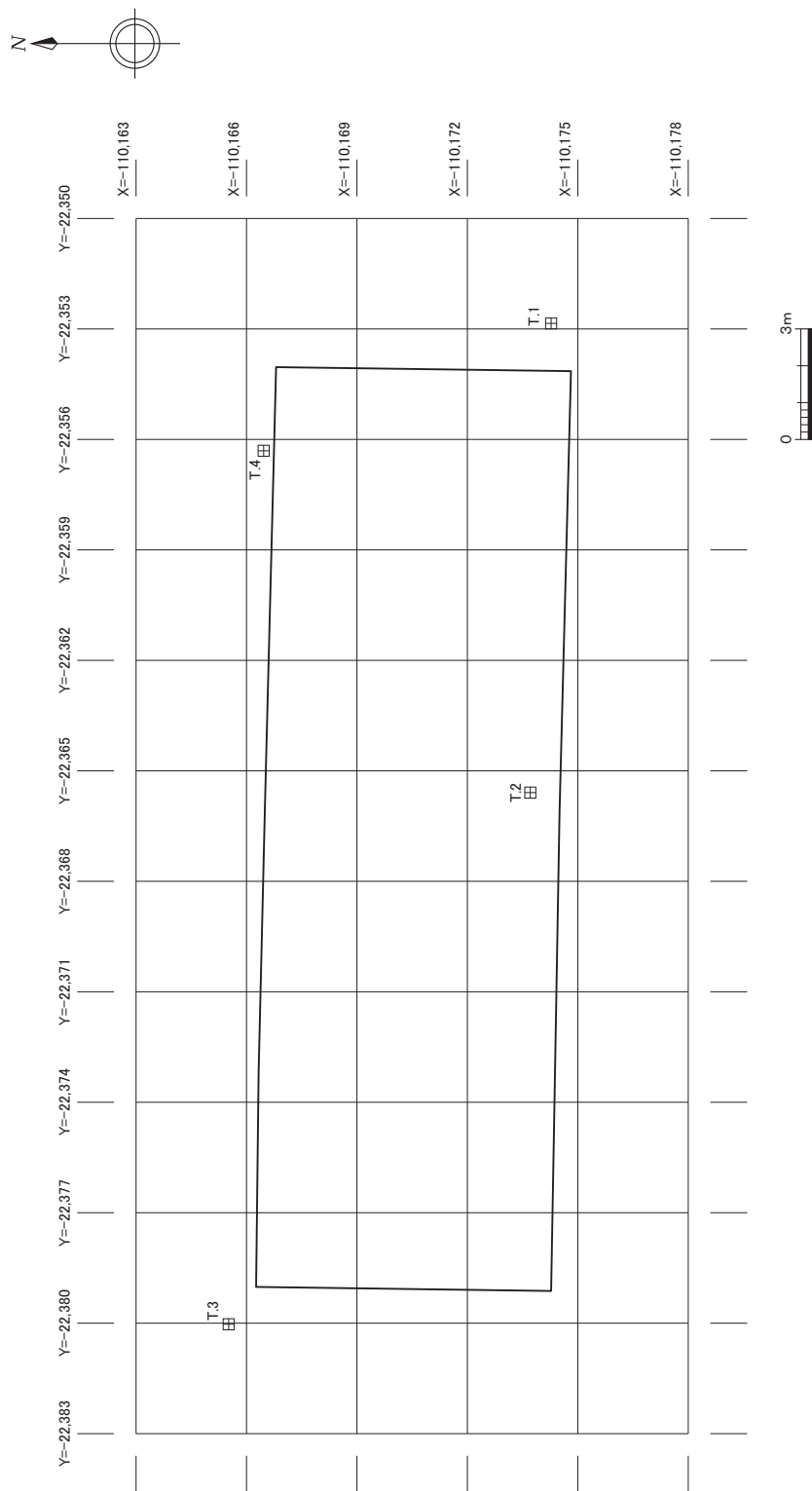


図2 調査区地区割り・基準点配置図 (1:200)



1. 調査前（東から）



2. 重機掘削作業（東から）



3. 作業風景



4. ドローン撮影による写真測量



5. 京都市文化財保護課による検査



6. 検証審査員による視察



7. 専門家による木舞の検証



8. 自然科学分析用木質採取

図3 発掘調査経過写真

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境

調査地は六角通と蛸薬師通のほぼ中央で、西洞院通の西側に位置している。平安京の条坊では西洞院大路・油小路・六角小路・四条坊門小路に囲まれた左京四条二坊十五町にあたり、四行八門地割では西四行北五門に位置し、北側敷地境がほぼ一町の南北の中心になる。調査区の東側は、西洞院大路の西側の築地・西側溝・路面及び西洞院川などが予想される。

この町には平安時代後期、大納言藤原実季（サネスエ）の邸宅「四条坊門亭」があったことが『拾芥抄』東京図によりわかる。また、藤原実季の娘苺子（シゲコ）（堀川天皇女御）が鳥羽天皇を生んだ際に、苺子の母が夢の中でお告げを受け四条坊門亭の敷地の中に賀茂社を勧進し建立した。この堂は建久5（1194）年の火災で焼失している。その後十二世紀中葉に東北角の土地が藤原某女、十三世紀初頭にこの町の西半分が僧最賢から黒御前に譲渡されるという平安時代から鎌倉時代の変遷がみられる。室町時代には土倉・酒屋が支配していたとみられ、天文14（1545）年に六角・四条坊門、油小路・西洞院の一町四方を土倉の沢村千松から本能寺が買い取っている。

参考文献

京都市「下京区」『史料 京都の歴史』第12巻 平凡社 1981年

「京都市の地名」『日本歴史地名体系』27 平凡社 1987年

『拾芥抄』改訂増補故実叢書22巻 明治図書出版株式会社 1993年

山田邦和『第三章 左京と右京』平安京提要 角川書店 1994年

2 既往の調査

十五町地内ではこれまで4回の発掘調査が行われている（図5・表1）。

38は本調査区の北側に接する個所で2007年に発掘調査が行われた。検出した遺構は室町時代

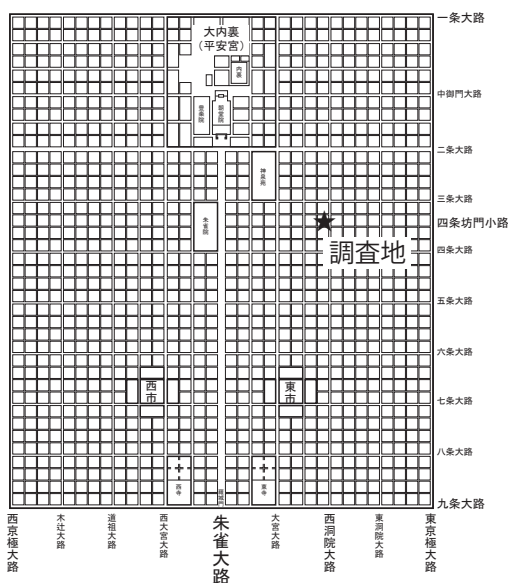


図4 調査地位置図・平安京条坊（1：80,000）

を中心に検出し西洞院川と考えられる溝、本能寺寺域内を区画すると考えられる濠、本能寺の変に伴う整地層、土器・瓦溜などを検出した。遺物では、多くの焼瓦や土器とともに異体字で表記した「𪛗」の字の軒丸瓦が出土している。

室町時代以前の遺構は、平安時代後期の井戸1基を検出している。

39は2007年に調査が行われた。一町の中心西側に位置する調査で礎石根固め3基、雨落ち溝・区画溝などを検出しており、本能寺に関わる遺構とみられる。土坑の埋土から焼土や炭とともに多くの焼けた瓦が出土している。また、

異体字の「𪛗」の字の軒丸瓦が出土している。

室町時代以前の遺構は平安時代中期の土坑、鎌倉時代初期の土坑を検出している。

40 は 2007 年に調査が行われた。一町の南東部、西洞院大路に位置する調査である。僅か 10 m² の調査であったが西洞院川を埋めた整地層、本能寺の南限を示すとみられる濠を検出している。この東西方向の濠の検出により、これにより本能寺の寺域が『京都坊目誌』などの南北二町説よりも『天文十四年六月廿四日付沢村千松売券』にみられる「六角与四条坊門油小路と西洞院中間方四町」とする四条二坊十五町の一町四方と考えられるようになった。

41 は 2012 年に行われた調査。調査地は十五町の北東角にあたる。室町時代の遺構を中心に検出しており六角小路南築地推定線と西洞院大路西築地推定線の内側に沿う L 字形の溝、西洞院川、土坑・井戸などを検出している。また、本能寺創建に伴う整地層、本能寺の変後の整地層も検出している。

室町時代以前の遺構は、平安時代後期の土坑 1 基を検出している。

31 は四条二坊十四町の調査である。2002 年から 2003 年にかけて調査が実施された。この調査で四条坊門南に沿い下京惣構とみられる東西方向の濠を確認した。

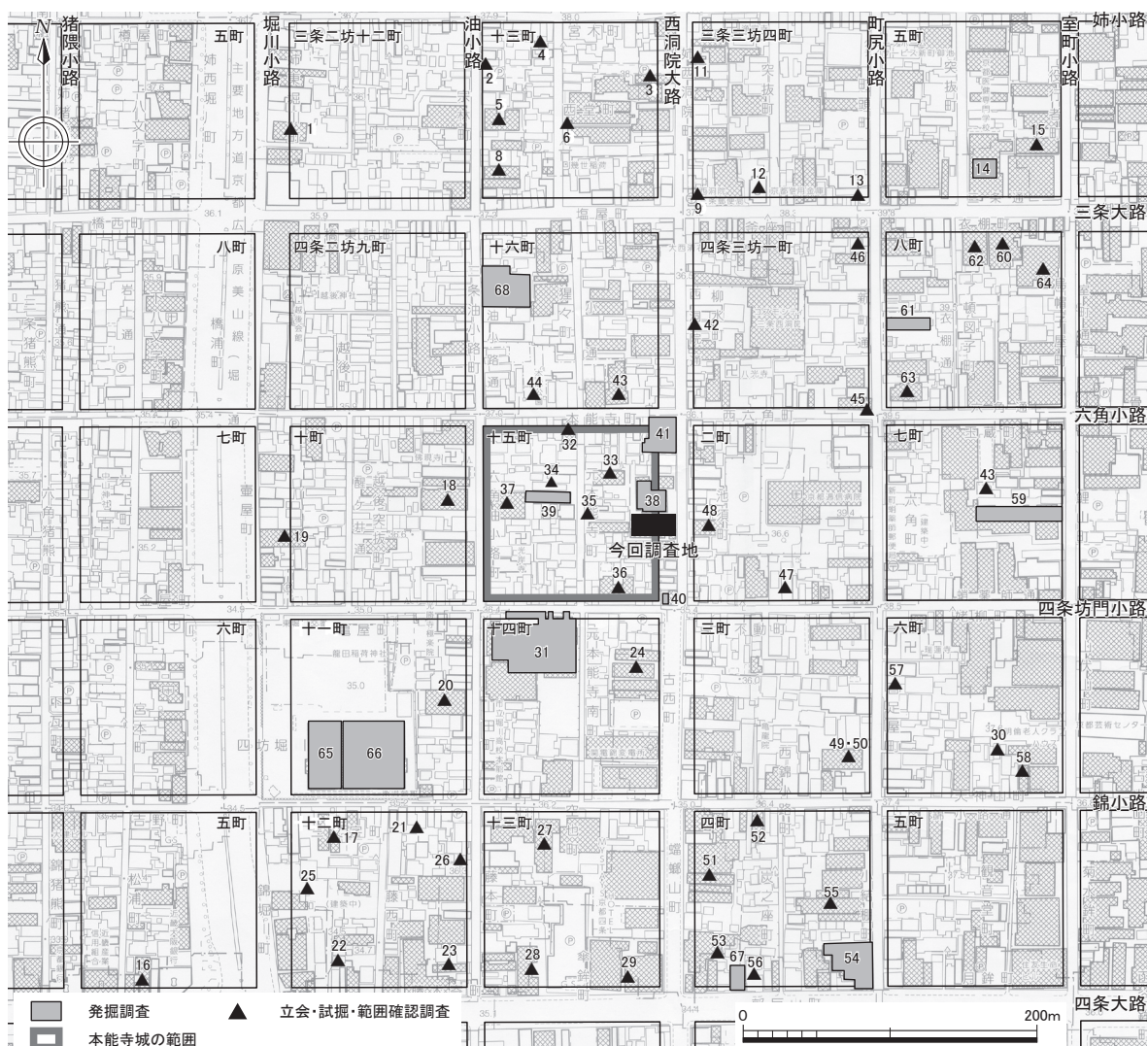


図5 既往調査位置図 (1:5,000)

表 1 既往調査一覧表

調査No	調査地点	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	三条二坊十二町	立会	地表下 0.85m 以下、流れ堆積	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 8 年度』京都市文化市民局 1997 年
2	三条二坊十三町	立会	室町、鎌倉、平安後・中期の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 60 年度』京都市文化観光局 1986 年
3	三条二坊十三町	立会	室町の土坑、鎌倉の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 60 年度』京都市文化観光局 1986 年
4	三条二坊十三町	立会	検出できず	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 63 年度』京都市文化観光局 1988 年
5	三条二坊十三町	立会	地表下 0.93m で時期不明の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 63 年度』京都市文化観光局 1988 年
6	三条二坊十三町	立会	時期不明の包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 3 年度』京都市文化観光局 1992 年
7	三条二坊十三町	立会	平安後期の包含層、町尻小路の路面など	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 3 年度』京都市文化観光局 1992 年
8	三条二坊十三町	立会	中世の包含層、室町の井戸	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』京都市文化市民局 1999 年
9	三条三坊四町	立会	地表下 130 cm までは近現代層、以下に旧流路の堆積土で平安後期の摩滅した遺物が出土	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和 55 年度』京都市文化観光局 1981 年
10	三条三坊四町	立会	江戸の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 59 年度』京都市文化観光局 1985 年
11	三条三坊四町	立会	室町・鎌倉の包含層、時期不明の西洞院大路の路面	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 平成元年度』京都市文化観光局 1991 年
12	三条三坊四町	立会	室町の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 平成元年度』京都市文化観光局 1991 年
13	三条三坊四町	立会	掘削深度内盛土	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 8 年度』京都市文化市民局 1997 年
14	三条三坊五町	発掘	江戸～桃山の土坑・井戸、室町～鎌倉の土坑、鎌倉～平安後期の土坑・井戸、平安の土坑・溝、縄文晩期の土坑など	上村憲章『平安京左京三条三坊五町・烏丸御池遺跡』古代文化調査会 2011 年
15	三条三坊五町	立会	桃山～室町の包含層、平安後期～平安中期の包含層、室町～鎌倉の土坑	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』京都市文化市民局 1999 年
16	四条二坊五町	試掘	平安中期の土坑・ピット、室町の土坑・ピット、ピット内より勾玉 2 個出土	『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和 56 年度』文化観光局 1982 年
17	四条二坊十町	立会	江戸・桃山の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 平成 2 年度』京都市文化観光局 1991 年
18	四条二坊十町	立会	地表下 0.86m で室町～平安の土坑など、室町～鎌倉の落ち込みから白磁・青磁などの遺物多数出土	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 7 年度』京都市文化市民局 1996 年
19	四条二坊十町	立会	江戸以降の整地層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』京都市文化市民局 1999 年
20	四条二坊十一町	立会	地表下 1.7m で平安中期の包含層を切り込み桃山～室町の土坑、金箔付着の土師器が出土、鎌倉の落込みなど	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 8 年度』京都市文化市民局 1997 年
21	四条二坊十二町	立会	鎌倉の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 60 年度』京都市文化観光局 1986 年
22	四条二坊十二町	立会	江戸の柱穴	『京都市内遺跡立会調査報告 平成 3 年度』京都市文化観光局 1992 年
23	四条二坊十二町	立会	時期不明の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 平成 2 年度』京都市文化観光局 1991 年
24	四条二坊十二町	立会	鎌倉の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 平成 2 年度』京都市文化観光局 1991 年
25	四条二坊十二町	試掘	中世の包含層	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 3 年度』京都市文化観光局 1993 年
26	四条二坊十三町	立会	地表下 1.1 m で平安中期の包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 7 年度』京都市文化市民局 1996 年
27	四条二坊十三町	立会	鎌倉・平安後～中期の包含層、地表下 1.3 m で鎌倉・平安後期の土坑	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 8 年度』京都市文化市民局 1997 年
28	四条二坊十三町	立会	室町の包含層・土坑、平安前期の包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』文化観光局 1998 年
29	四条二坊十三町	立会	地表下 1.85 m 以下流れ堆積	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』文化観光局 1998 年
30	四条二坊十四町	立会	室町の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 55 年度』京都市文化観光局 1981 年
31	四条二坊十四町	発掘	平安から江戸にかけての遺構、四条坊門小路・南側溝、下京惣構と考えられる溝等	平尾政幸 山口真「平安京左京四条二坊十四町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
32	四条二坊十四町	立会	地表下 0.86m で室町の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 平成 2 年度』京都市文化観光局 1991 年
33	四条二坊十五町本能寺城	立会	地表下 1.5m で室町の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 60 年度』京都市文化観光局 1986 年
34	四条二坊十五町本能寺城	立会	地表下 0.05m で江戸の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 60 年度』京都市文化観光局 1986 年
35	四条二坊十五町本能寺城	立会	地表下 1.26m で江戸の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 平成 2 年度』京都市文化観光局 1991 年
36	四条二坊十五町本能寺城	試掘	1 T：地表下 1.25 m で中世の土坑 3 基、2 T：地表下 0.86 m で中世の南北溝	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 6 年度』文化観光局 1995 年

調査No	調査地点	調査法	調査成果概要	掲載文献
37	四条二坊十五町本能寺城	立会	地表下 0.95m 以下、鎌倉の包含層、室町～鎌倉の土坑・水溜遺構、平安後期の井戸	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 7 年度』京都市文化市民局 1996 年
38	四条二坊十五町本能寺城	発掘	西洞院川とみられる溝、整地層、寺域を画すとみられる堀、「能」の異体字で刻まれた軒丸瓦、瑪瑙製の軸端、卒塔婆など	吉川義彦 鈴木久男『本能寺跡発掘調査報告 平安京左京四条二坊十五町』関西文化財調査会 2008 年
39	四条二坊十五町本能寺城	発掘	土坑、礎石根固め 3 基、雨落ち溝、区画溝、「能」の異体字で刻まれた軒丸瓦	山本雅和「Ⅳ 平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008 年
40	四条二坊十五町本能寺城	発掘	西洞院川を埋めた整地層、本能寺南限を示すとみられる濠	平尾政幸「平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-11』埋文研 2008 年
41	四条二坊十五町本能寺城	発掘	平安後期の土坑 1 基、室町の遺構（六角小路南築地推定線と西洞院大路西築地推定線の内側に沿う L 字形溝、西洞院川、土坑、井戸）、本能寺創建に伴う整地層、本能寺の変後の整地層	家崎孝治「本能寺城跡—平安京左京四条二坊十五町—」古代文化調査会 2012 年
42	四条二坊十六町西洞院大路	立会	地表下 1.6m で時期不明の湿地状堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 59 年度』京都市文化観光局 1985 年
43	四条二坊十六町	立会	江戸の落込み、室町の土坑、鎌倉の包含層など、地表下 1.55m で流れ堆積	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』文化観光局 1998 年
44	四条二坊十六町	立会	室町～鎌倉の包含層、平安中期の包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』文化観光局 1999 年
45	四条三坊一町	立会	室町の包含層、平安後期の包含層、平安後期の土坑	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和 55 年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981 年
46	四条三坊一町	立会	鎌倉～平安末の包含層、土坑	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』京都市文化市民局 1999 年
47	四条三坊二町	立会	地表下 1.24m で鎌倉の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 60 年度』京都市文化観光局 1986 年
48	四条三坊二町	立会	江戸の包含層、鎌倉の土坑	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』京都市文化市民局 1999 年
49	四条三坊三町	立会	掘削深盛土内	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 7 年度』京都市文化市民局 1996 年
50	四条三坊三町	立会	近世の包含層、流れ堆積	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』京都市文化市民局 1999 年
51	四条三坊四町	立会	江戸・鎌倉・平安末の包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和 59 年度』京都市文化観光局 1985 年
52	四条三坊四町	試掘	室町～鎌倉の土坑など	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 平成 2 年度』京都市文化観光局 1991 年
53	四条三坊四町	試掘	近世以降の井戸、中世の南北溝、鎌倉の土坑、平安の土坑・柱穴	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 平成 12 年度』京都市文化市民局 2001 年
54	四条三坊四町	発掘	室町の土坑・井戸・柱穴・溝・炉・地下室、鎌倉の土坑・柱穴・炉、鎌倉～平安の土坑・井戸・柱穴・地下室、平安の井戸・柱穴・溝・園地、中世の鋳造関連遺物が出土	『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント 2007 年
55	四条三坊四町	立会	室町前期・鎌倉後期・平安の包含層、桃山～鎌倉の土坑	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 7 年度』京都市文化市民局 1996 年
56	四条三坊四町	立会	地表下 0.6 m で焼土層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 8 年度』京都市文化市民局 1997 年
57	四条三坊六町	試掘	室町の整地層	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 5 年度』文化観光局 1994 年
58	四条三坊六町	立会	中世の柱穴、鎌倉・平安後期の土坑	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』文化観光局 1998 年
59	四条三坊七町	発掘	江戸～桃山の土坑・井戸・柱穴・溝、室町～鎌倉の土坑・柱穴・溝、平安後期の土坑など	『昭和 54 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012 年
60	四条三坊八町	試掘	地表下 0.9 m で室町の包含層、地表下 1.0 m で室町の土坑と平安の土坑	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 6 年度』文化観光局 1995 年
61	四条三坊八町	発掘	近世初頭の土坑、室町～鎌倉後半の地下室・土坑・溝・井戸、鎌倉前半～平安後期の土坑・溝、平安前期の土坑、弥生後期の溝、前期の土坑など	平尾政幸「平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-2』埋文研 2013 年
62	四条三坊八町	立会	地表下 0.93 m 以下で平安後期の包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』文化観光局 1998 年
63	四条三坊八町	立会	地表下 1.3 m で江戸の井戸、鉄滓・フイゴなどが出土する	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』文化観光局 1998 年
64	四条三坊八町	立会	地表下 1.38m で近世包含層、江戸初期の方形土坑、華南三彩盤・高台寺蒔絵などが出土した	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』文化観光局 1998 年
65	四条二坊十一町	発掘	堀川小路より東に及ぶ流路、室町後半の土器	『6 平安京左京四条二坊』『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987 年
66	四条二坊十一町	発掘	平安中期の溝、平安後期～鎌倉の井戸・土坑、室町の溝・井戸・土坑・柱穴、鋳型。桃山～江戸前期の溝・櫓・路面など	『4 平安京左京四条二坊』『平成 9 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999 年
67	四条三坊四町	発掘	平安末の井戸、鎌倉の井戸・土坑、室町の井戸・土坑・地下室、江戸初頭の井戸・土坑。弥生土器など	東洋一「平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-15』埋文研 2016 年
68	四条二坊十六町	発掘	油小路東築地の痕跡とみられる高まり、中世の北二門と北三門の境に該当する小径、近世前期の町屋と半地下式穴倉、近世の建物・井戸・流し場・染色工房に関わる窯場跡など、	辻広志（編）村尾政人 河野凡洋 千喜良淳 高橋敦『平安京左京四条二坊十六町跡・本能寺城跡』国際文化財株式会社 2017 年

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図6・7）

調査地は東西に長い敷地で、既設建物の解体時のコンクリートガラなどで地表面は整地されている。地表面の標高は東側の西洞院通に面した地点で 35.6 m、西側で 35.8m を測る。

現代の整地層下は基本的に遺構の重複による堆積で、部分的にシルト層があり桃山時代から江戸時代の遺物を包含する。この層を除去し第3・4面とした遺構を検出する。

調査区西側では現代整地層直下の標高 35.6 ～ 35.7m で遺構面となり基盤層（地山）の最も標高の高い地点は 35.2m である。基盤となる地山層は、第 51 層 10YR6/6 明黄褐色シルト層である。

表2 遺構概要表

検出した遺構の総数：140

検出面	時期	主な検出遺構
4 面	室町時代	土坑 70、溝 77・111・140
3 面	室町時代～江戸時代	井戸 127、土坑 123
1・2 面	江戸時代	土坑 95・112・85・87・88・117、溝 102・107・98・137、池 86

2 検出遺構

文化財保護課の指導では5面での調査であったが基本層序の項で記した通り遺構の重複により4面の遺構面として調査を行った。実際には1・2面の時期差はない。また、鎌倉時代より古くなる遺構の検出は無かった。ここでは主要な遺構について記述する。

（1）第4面

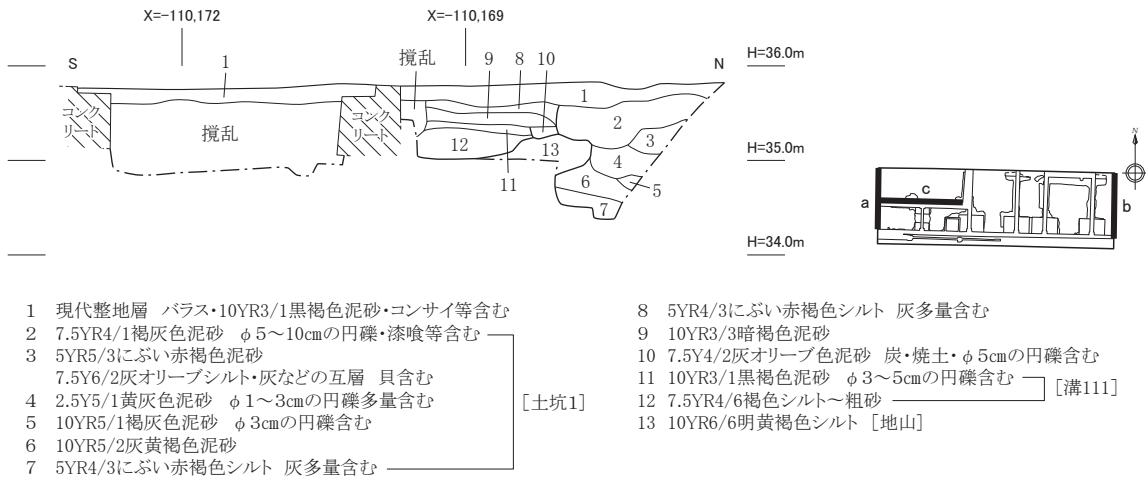
土坑、溝などを検出した。

土坑 70（図12 図版8－1） 調査区の西側 Y=22,372 ライン付近で検出した。南を攪乱に、北側を土坑に削平され東西 0.75m、南北は 1.15m 以上、検出面からの深さ 0.08m を測る。多くの完形に近い土師器が出土しており土坑墓と思われるが確証はない。土師器は脆く、取り上げ時に小破片になり、また、接合がしにくい状態であった。8B 期と思われ、室町時代前半にあたる。

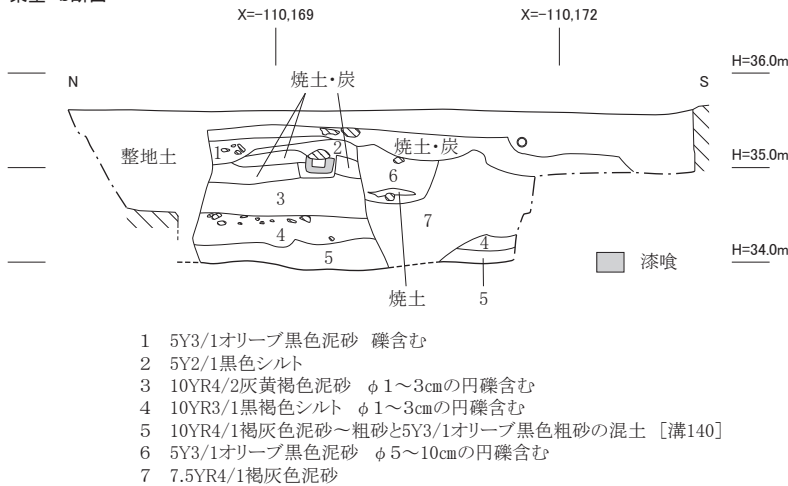
溝 77（図7・8 図版8－2） 調査区の西側で検出した。検出面での幅約 3.2m、深さは北壁断面で 1.9m を測る。南東側は建物のコンクリート基礎が深く、また、北側の東肩部も攪乱により乱されているが西側の肩部の立ち上がりから復元すると上面での幅は約 3.6m とみられる。北壁断面図に見られる第 21 層より上層は褐灰色の泥砂層に黄褐色粘土ブロック、5 ～ 10 cm の円礫を含む硬く締まった層で、西側から短時間で埋めていると考えられる。下層の第 25・26 層暗オリーブ灰色シルト層は帯水層とみられる。出土遺物には時期差はない。

北に接する 2007 年の調査では溝 77 の延長部分に同規模の遺構を確認しているが時期的に検討を要するものと思われる。

西壁 a断面



東壁 b断面



溝77南壁 c断面

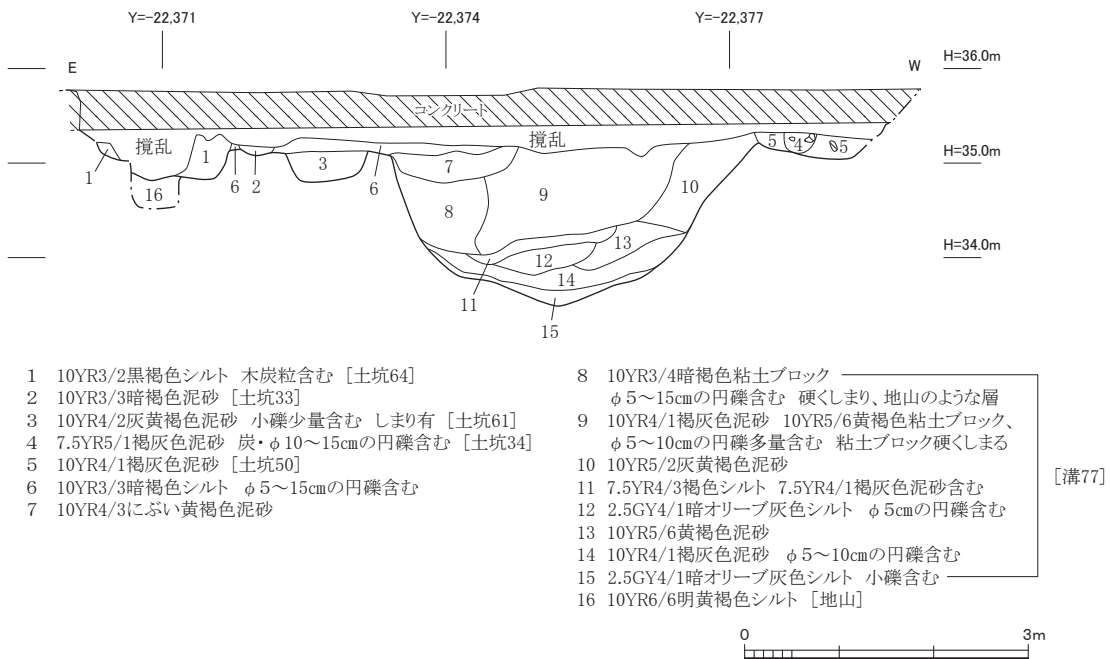
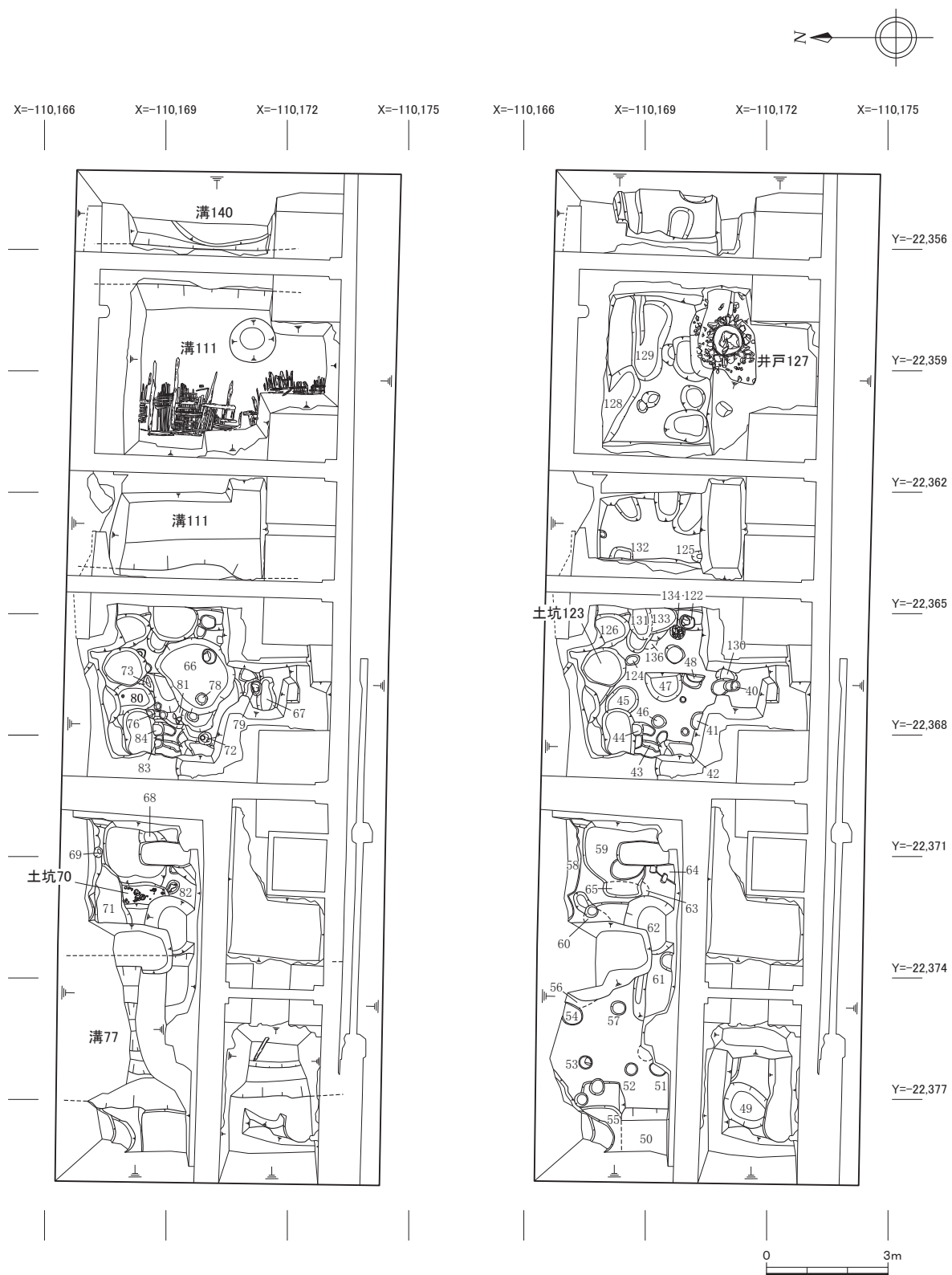


図7 西壁・東壁・溝77南壁断面図 (1 : 80)



第4面平面图

第3面平面图

图8 第4·3面平面图 (1 : 150)

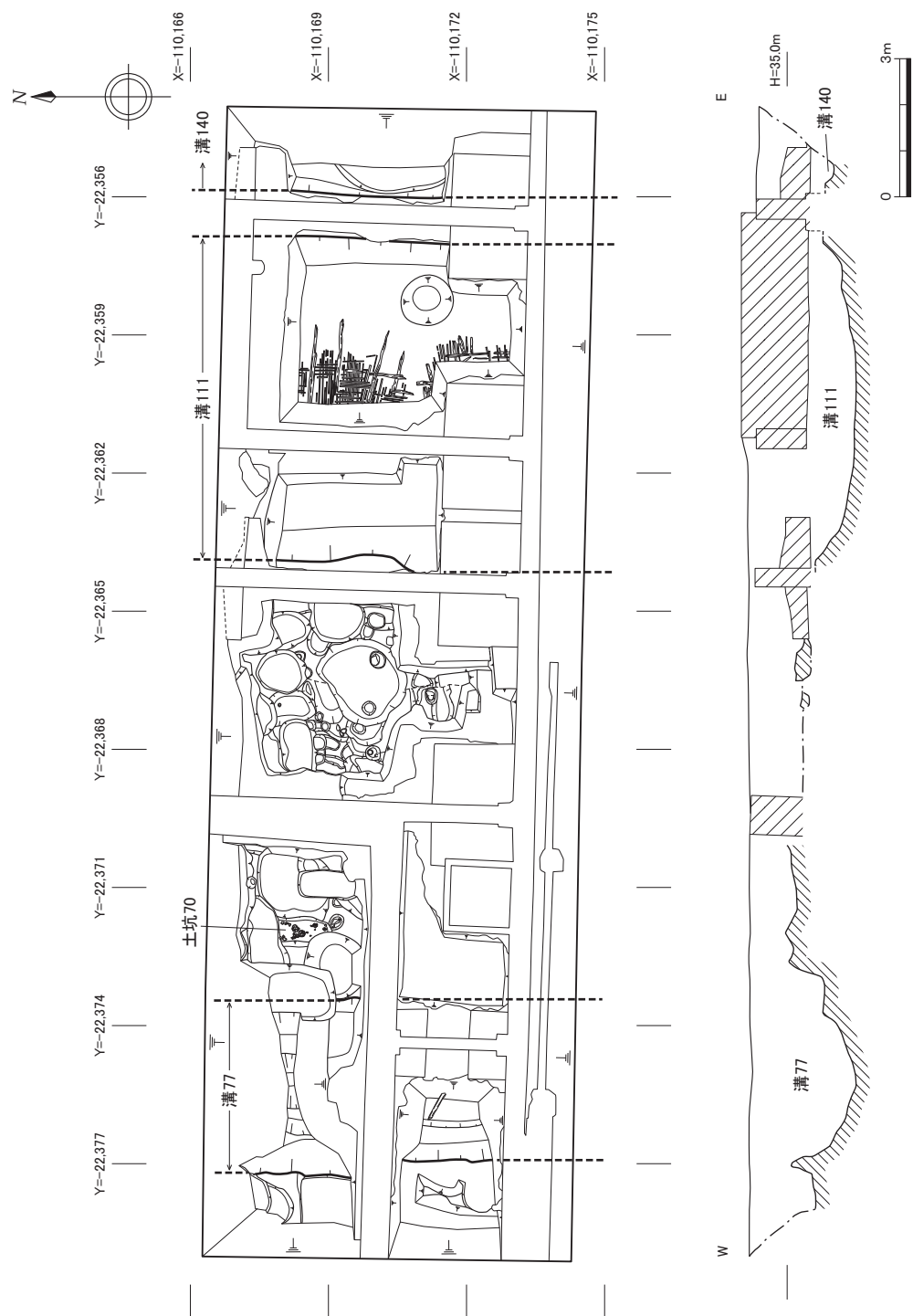


图9 第4面遺構実測図 (1 : 150)



図10 木舞状木製品詳細図 (1 : 40)

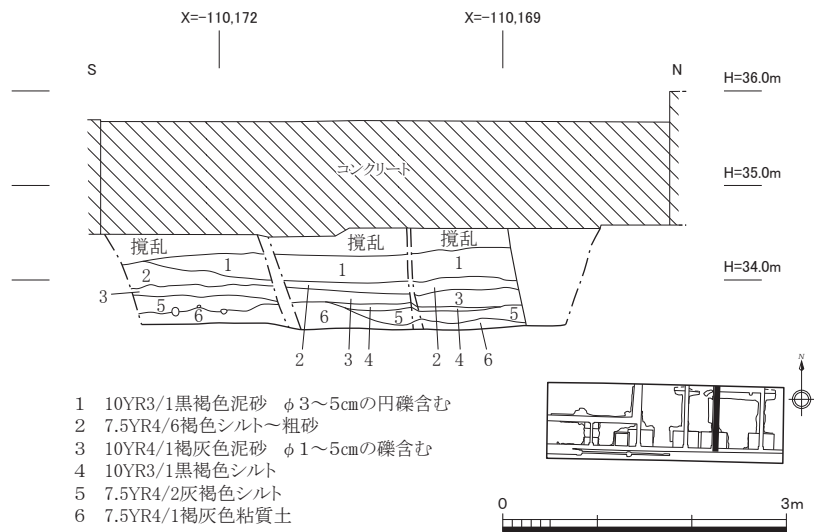


図11 溝111南北断面図（1：80）

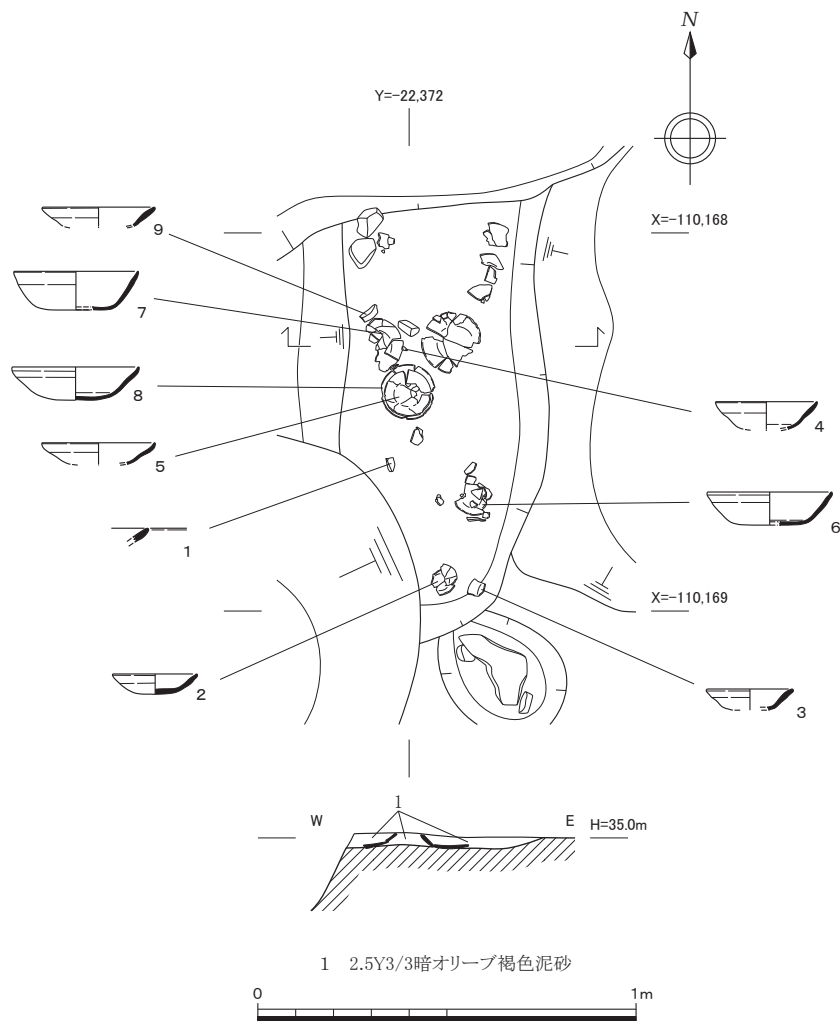
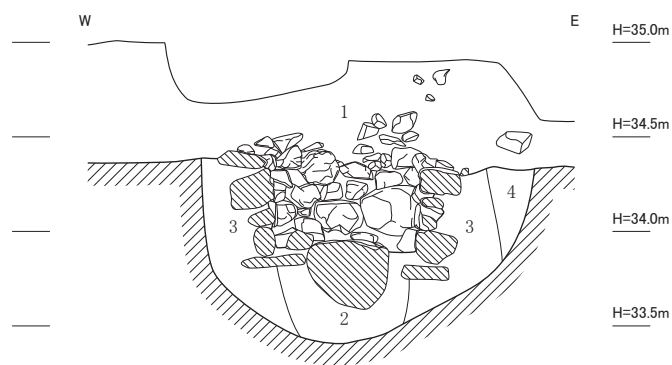
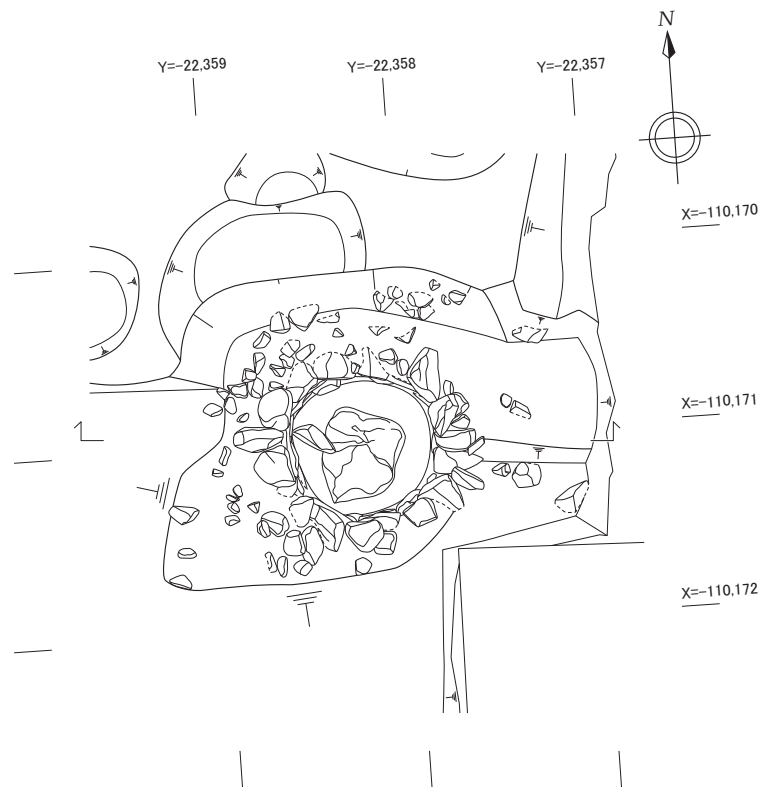


図12 土坑70平面・断面図（1：20）



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
- 2 10YR4/1褐灰色シルト
- 3 10YR4/1褐灰色泥砂
- 4 2.5Y4/1黄灰色シルト φ 5～20cmの礫含む



図13 井戸127平面・断面図（1：40）

溝 111 (図8～11 図版8－2、9) 調査区の東側で検出した。検出面での幅約 7.0m、深さ 0.9m を測る。検出面の標高は 34.4 ～ 34.5m であるが、調査区西側では地山面の標高が 35.1m であり、深さは 1.5m ほどあった可能性がある。

埋土は黒褐色から褐色のシルト層に 1 ～ 5 cm の円礫を含む層である。東側肩部ではオリーブ色粗砂層が堆積する。この層中には 15 ～ 30 cm の礫を多く含み、また瓦・塼も多く出土した。東側の肩部を補修した層かとも思われるが堀の肩となる層にしては締まりがない。

北に接する 2007 年の調査 (既往調査 38) では溝 111 の西肩の延長部分で同様に溝が検出されており、西洞院川に比定している。

木舞状木製品 溝 111 の底面から 0.2m ほどの粘質土から泥砂層の堆積土から竹及び丸太材・板材を組み合わせた建具又は木舞とみられる遺物を検出した。東西方向の溝にほぼ並行に検出した。

長さ約 180 cm、幅又は直径約 10 cm の柱状の木材を幅約 60 cm に置き、間に縦に 110 cm ほどの板材を置き、横に竹又は薄い板材を格子状に組んでいる。壁土と思われるものの出土が確認されなかったため木舞と断言はできないが、柱材の規模などから建具ではないとみられる。

図 10 の分析資料①はクリ、分析資料②はタケ、分析資料③はスギという樹種同定の結果が得られている。

溝 140 (図8 図版4－2) 調査区の東端で検出した。当初は溝 111 が東に続くと思われたが、Y=22.356 ラインのコンクリート基礎直下で地山層が上がっており別の遺構としたが、調査した部分が狭く少ないため詳細は不明である。西洞院川とみられる。

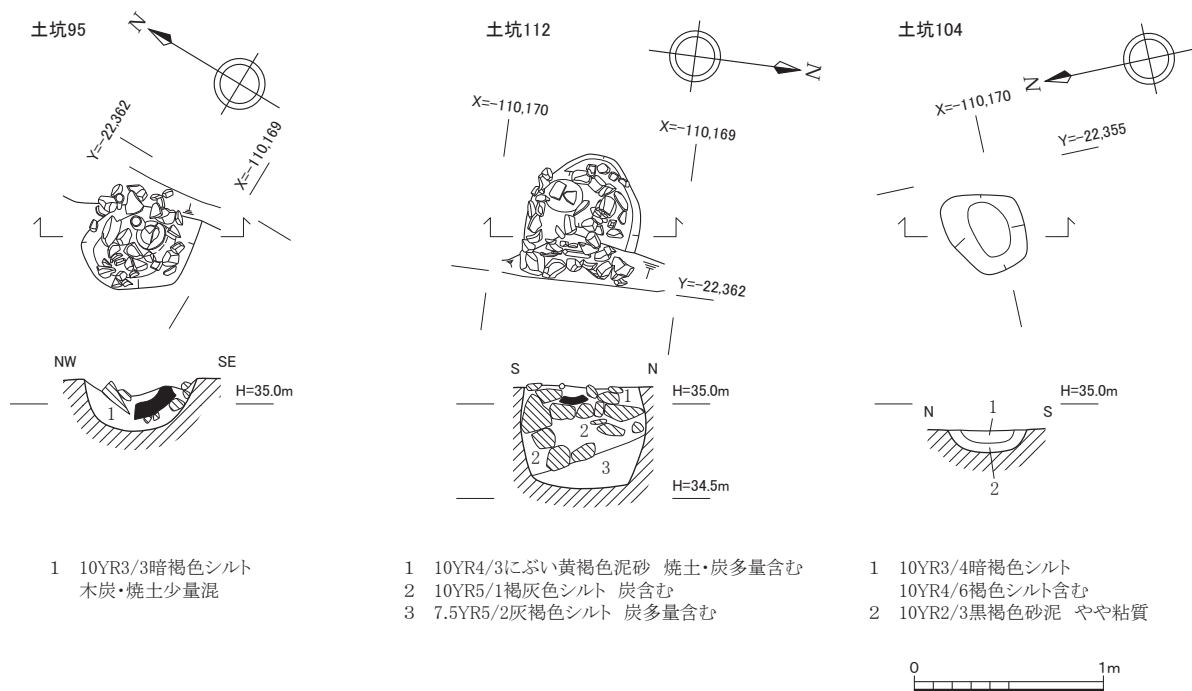


図 15 土坑95・112・104平面・断面図 (1 : 40)

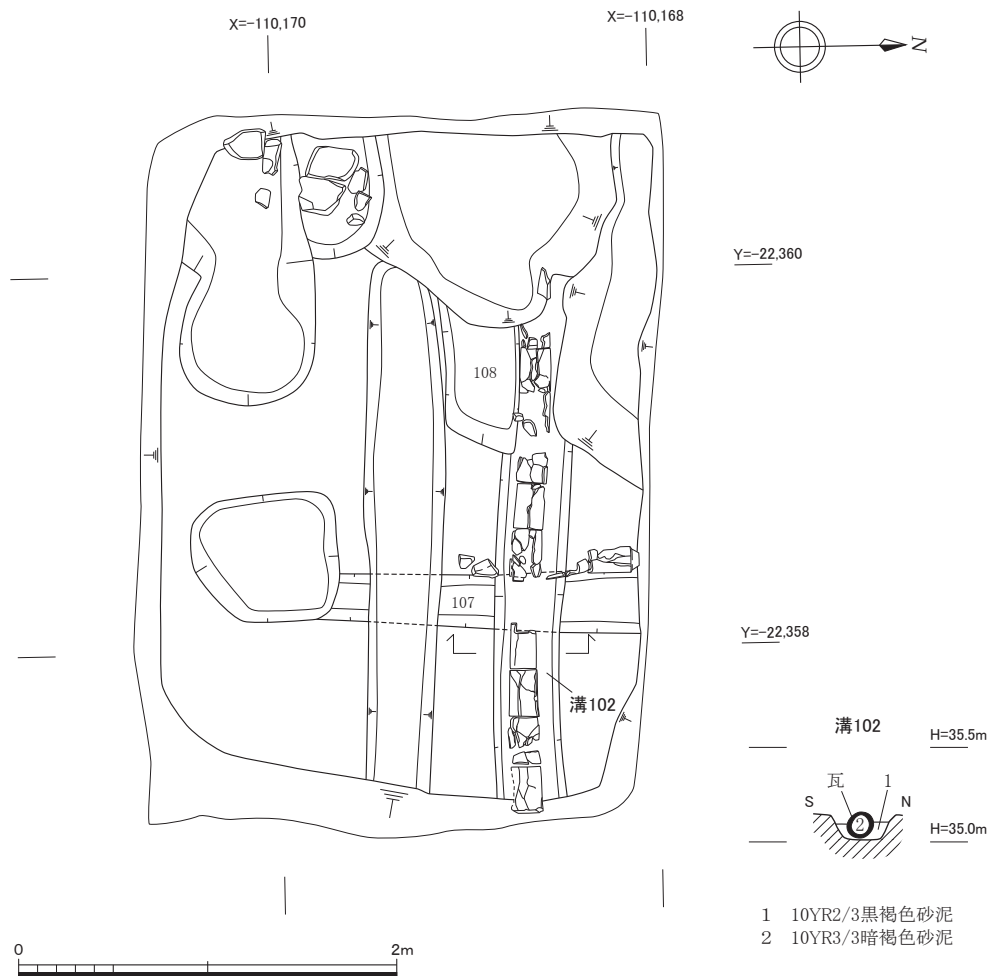


図16 溝102平面・断面図（1：40）

（2）第3面

井戸 127（図8・13 図版7） 調査区の東側、溝 111 の埋土を切って検出した。円形石組井戸であるが石組の大半はコンクリート基礎により破壊される。掘方の直径 1.8m、石組の内法は直径 0.75m、深さ 1.0m を測る。石組内下部に長径 0.5m、短径 0.4m、厚さ 0.45m の大きな石（チャート）で井筒内を閉塞している。出土遺物には土師器・瓦器・焼締陶器・白磁・瓦・塼などが出土しているが時期を確定できる遺物はない。

土坑 123（図8） 調査区中央部で検出した。検出面での規模は直径 1.0m、深さ約 0.3 m ある。埋土は灰褐色のシルト層で軒平瓦が 3 点出土した。

（3）第2面

土坑 95・112（図14・15 図版2、6－3） 調査区のはぼ中央部で検出した。溝 111 の埋土を切り込み検出した。

土坑 95 は東側をコンクリート基礎に削平される。南北 0.6m、東西 0.5 m 以上、深さ 0.25 m である。角礫を多く、焼土・炭をわずかに含む。時期のわかる遺物の出土は無い。

土坑 112 は東側をコンクリート基礎に削平され、南側は土坑 83 に削平される。南北 0.65m、東西 0.6 m 以上、深さ 0.55 m を測る。円礫を多く含み、焼土・炭も多量に含む。時期のわかる遺物の出

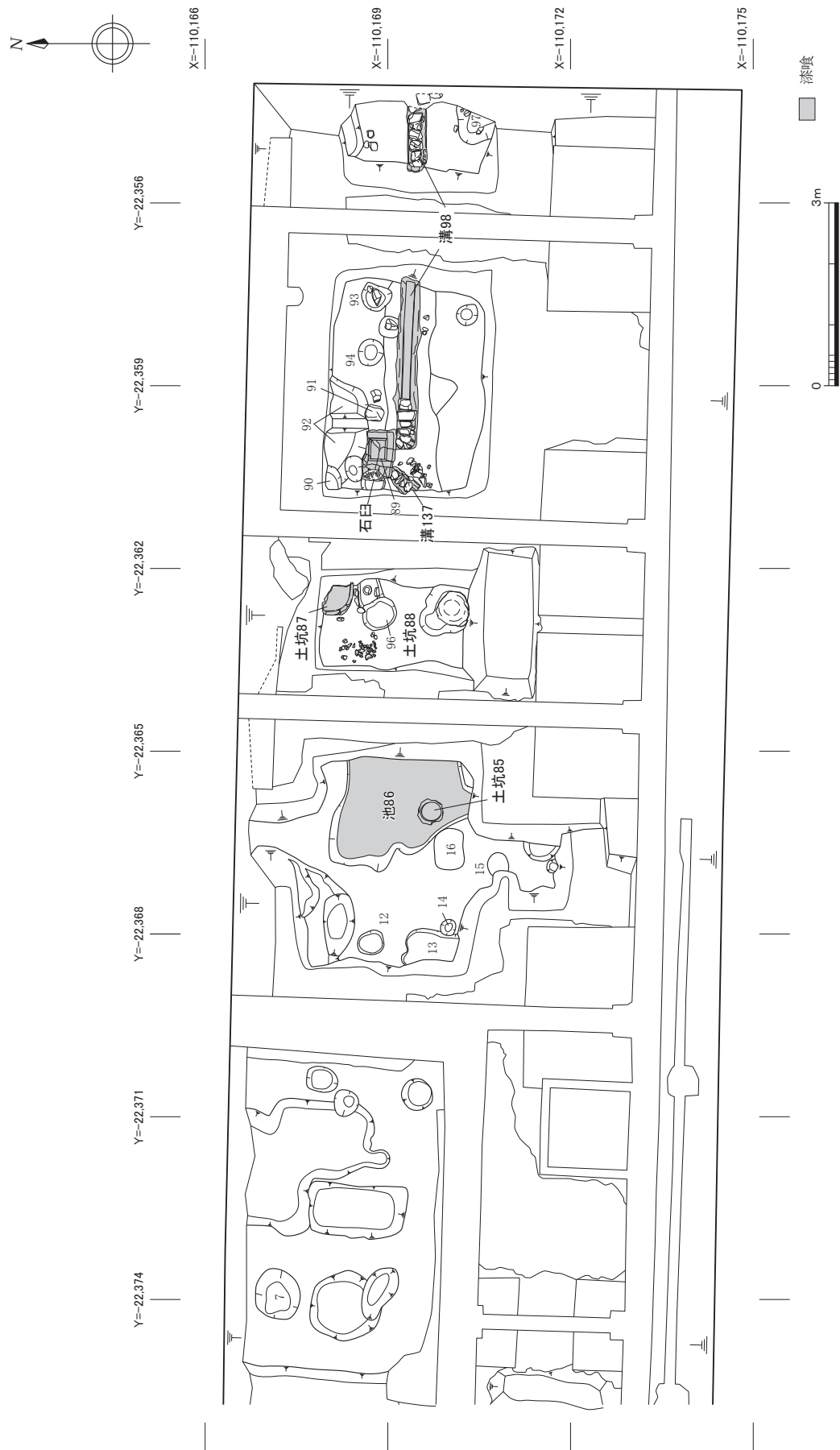


図17 第1面遺構実測図（1：100）

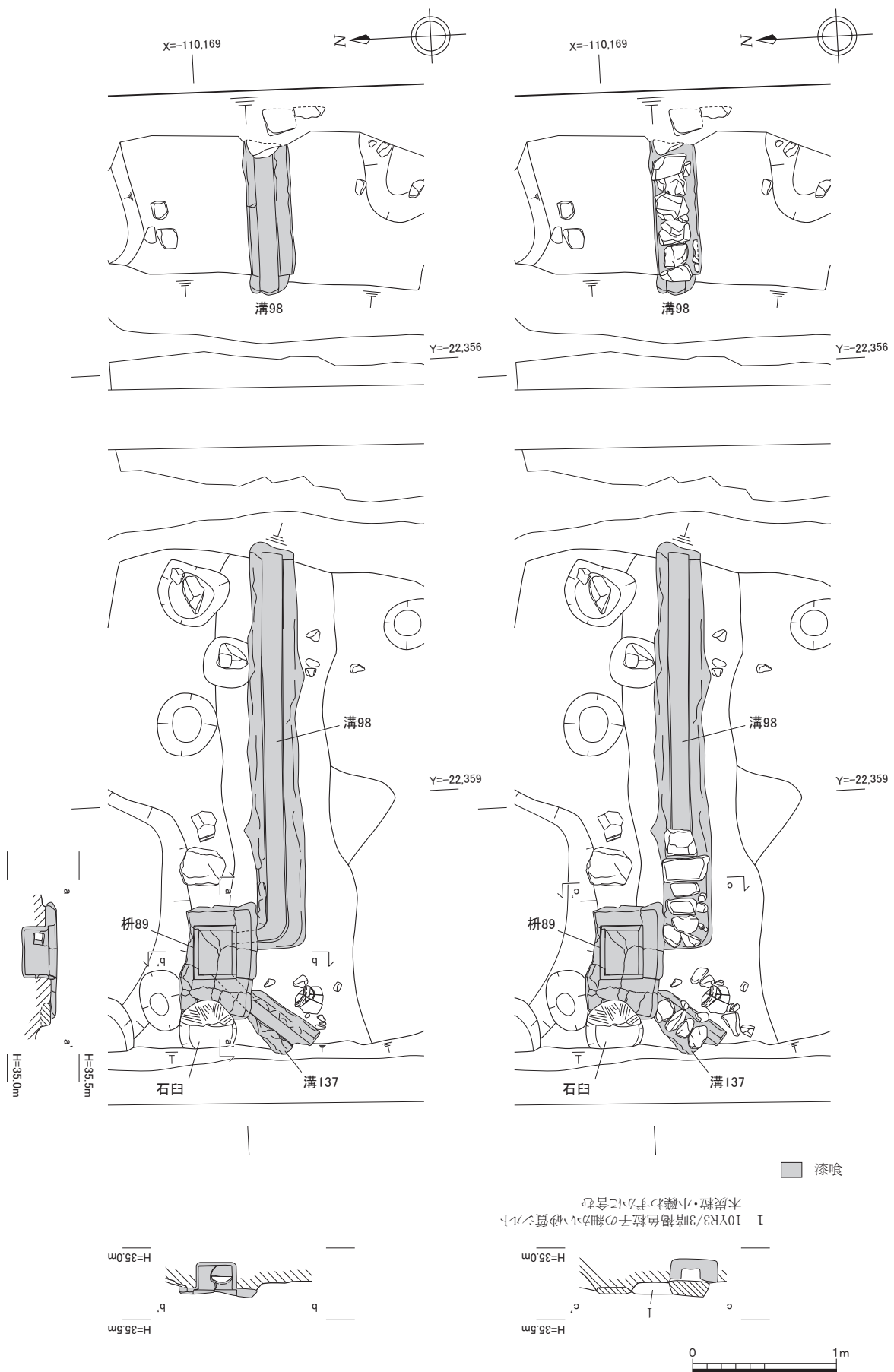


図18 溝98・137、枡89平面・立面・断面図（1：40）

土は無い。

溝 102 (図 14・16 図版 2 - 2、6 - 1・2) 調査区の東側で検出した。検出面での幅 0.4 m、深さ 0.15m で、Y=-22,354 付近から Y=-22,366 付近まで約 12m にわたり検出したが、途中の Y=-22,360 から Y=-22,365 ラインまでは他遺構との重複により削平されている。丸瓦を半裁せずに土管としてつなげていたとみられ、11 本分を確認している。西と東で約 19 cm の高低差があり西から東の西洞院川に向け傾斜する。

溝 107 (図 14・16 図版 2 - 2、6 - 1・2) Y=-22,358 ラインで溝 102 に直交して検出した。重複関係は不明であるが溝 102 同様に瓦土管を敷設していたものとみられる。

(4) 第 1 面

池 86・枺 89・漆喰溝 98・137 (図 14・17・18 図版 1 - 2・5) 調査区の中央部から東側で検出した。漆喰の池 86 とその中にある漆喰で固めた土坑 85・土坑 87 で池を構成するとみられる。

枺 89 は内法で短辺 0.25、長辺 0.3 m の漆喰で造られた枺。南西から溝 137 が枺に接続し、南から溝 98 に接続する。溝 98 は直角に曲がり東の西洞院川に流れ込むとみられ、溝 98 の枺との接合部と東端で約 13 cm の高低差がある。溝 98・137 とともに漆喰で溝を造り上面は扁平な川原石で蓋をしている。

土坑 88 (図 14 図版 1 - 1) Y=-22,362 ライン付近で検出した土坑。南・西側をコンクリート基礎により削平される。長さ 1.0m 以上の不正形な土坑とみられる。埋土は灰褐色泥砂層の単層で、土師器が多く出土した。12B 期の土師器である。

土坑 117 (図 14) 調査区西側で溝 111 埋土を切り込み検出した。西側と南西側をコンクリート基礎に削平される。東西 1.45m、南北約 0.5m、深さ 0.15m を測る。埋土は灰黄褐色泥砂層の単層である。土師器、施釉陶器、かんざしなど近世の遺物が出土している。

3 出土遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、遺物収納コンテナにして26箱出土した。金属製品はかんざしとみられる銅製品1点、石製品は石臼が1点出土している。木製品では、木舞とみられる木と竹を組んだ製品が出土したが、脆く形状を保つことができず、取上げは不可能であったため、放射性年代測定・樹種同定に必要な保存状態の良い部分のみを取り上げた(図10)。

出土遺物の時期は室町時代から江戸時代を中心に出土した。平安時代・鎌倉時代の遺物は小片のものが多く、ごく僅かである。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 箱数	A ランク 点数	B ランク 点数	C ランク 点数
平安・ 鎌倉時代	土師器 須恵器 瓦 器 緑釉陶器				
室町時代	土師器 瓦器 瓦質 土器 施釉陶器 焼 締陶器 輸入陶磁器 土製品 瓦		土師器 23 点 瓦器 1 点 瓦質土器 1 点 施釉陶器 4 点 輸入陶磁器 2 点 土製品 1 点 瓦 5 点		
室町時代 ～ 江戸時代	土師器 瓦質土器 施釉陶器 焼締陶器 輸入陶磁器 磁器 土製品 瓦 石製品 金属製品		土師器 9 点 施釉陶器 2 点 磁器 1 点 土製品 1 点 瓦 7 点 埴 1 点 金属製品 1 点 石製品 1 点	土師器 3 点 緑釉陶器 4 点 輸入陶磁器 1 点	
合計		30 箱	合計 60 点 (5 箱)	1 箱	24 箱

※コンテナ数の合計は、整理後遺物の抽出・復元などにより4箱多くなっている。

(2) 出土遺物

土坑 70 (図 19 図版 10 - 1)

土師器のみ出土した。皿 S (2～8) と皿 N (9) がある。1 は皿 S とみられるが破片接合できず、断面の実測にとどめた。2 は口径 8.8 cm、器高 2.2 cm。3 は口径 9.0 cm、器高 2.3 cm ある。共に体部は丸みをもって外反し端部は平骨に収める。4～8 は口径 10.7 cm～13.4 cm、器高 2.3 cm～4.1 cm ある。底部から体部は丸みを持ちやや屈曲して立ち上がる。端部は丸く摘み上げるように収める。胎土は 2・6・8 は灰白色を呈し精良、1・3～5・7 は黄橙色で精良であるがともに保存状態悪く脆い。9 は皿 N。口径 11.8 cm である。体部は緩く屈曲して外反し、端部は軽く上方に丸く収める。

溝 77 (図 19 図版 10 - 2)

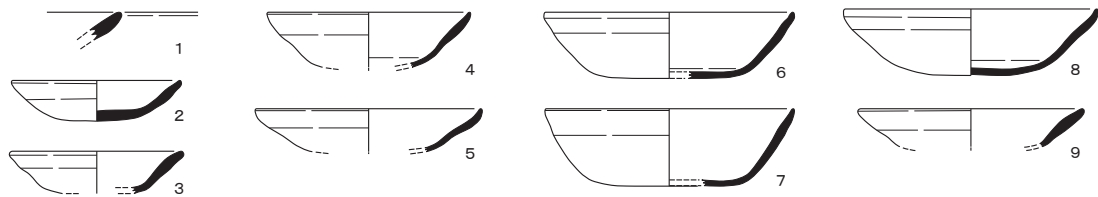
10・11 土師器皿 Sh。10 は口径 5.8 cm、器高 1.6 cm。11 は口径 7.4 cm。口縁部は外方に開く。12・13 は皿 S。12 は口径 7.8 cm、器高 1.9 cm。13 は口径 10.2 cm、器高約 2.4 cm。ともに端部は上方に立ち上がる。底部外面はオサエ。体部から内面はナデを施す。8B 期である。

14 は瓦器椀。口径 7.8 cm、底径 3.2 cm、器高 2.6 cm。断面三角形の高台を張り付ける。外面下半はオサエ、上半はヨコナデを施す。内面は横方向のミガキを丁寧に施している。

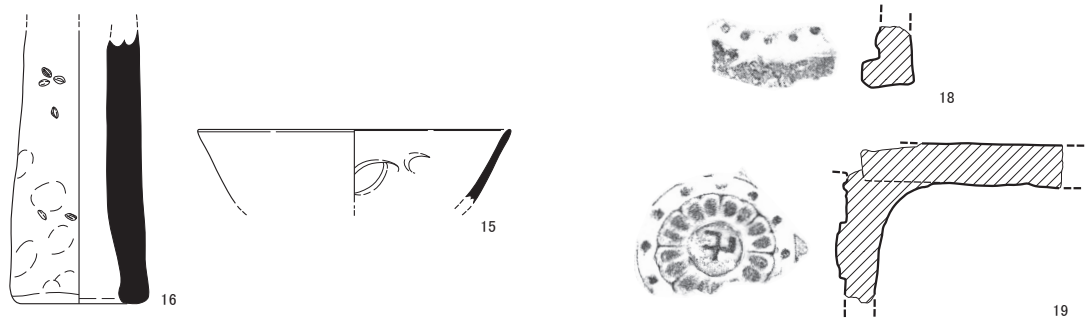
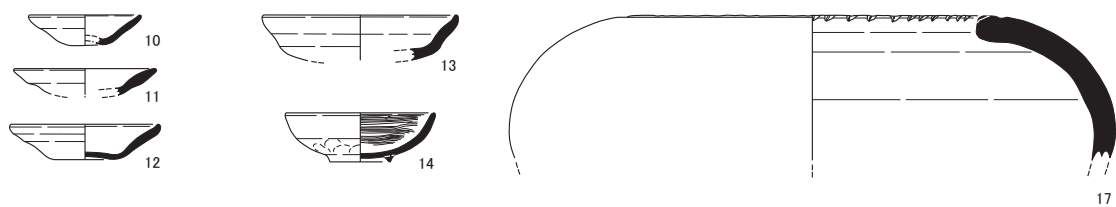
15 は輸入青磁椀口縁部。口径 16.4 cm。

16 はふいごと思われる。全面をナデ・オサエで調整している。方側が破損するが被熱を受けて

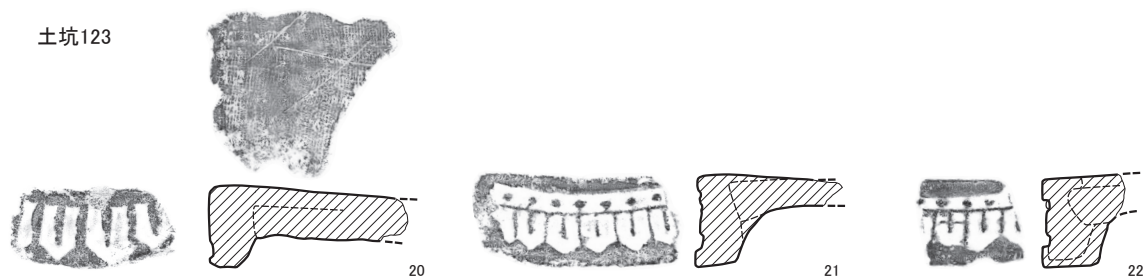
土坑70



溝77



土坑123



溝111

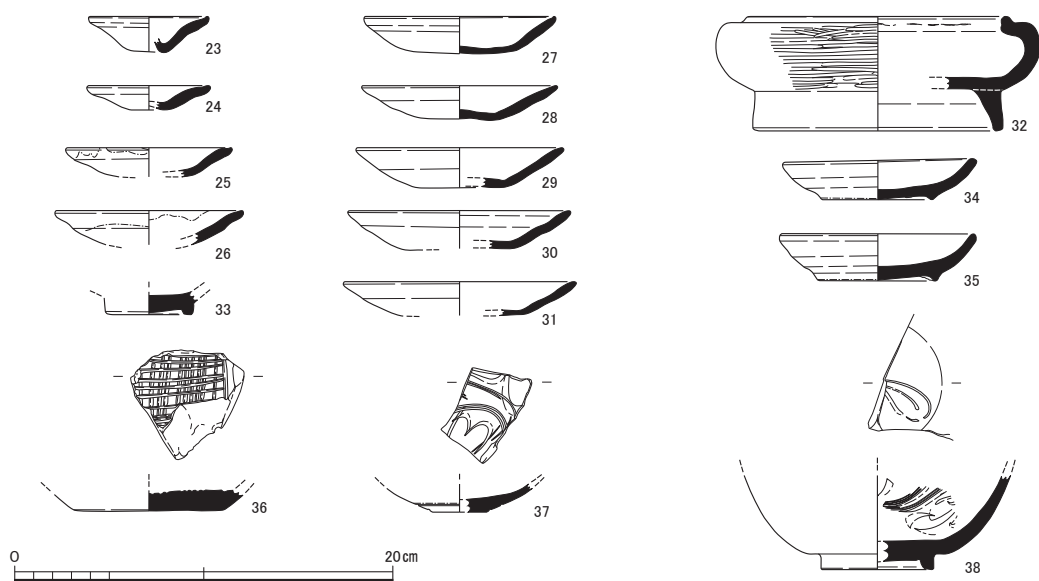
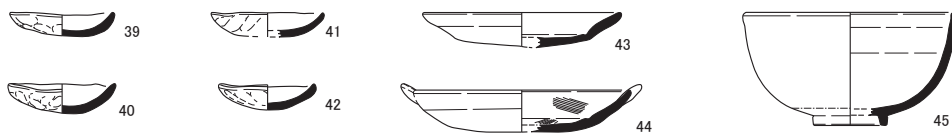
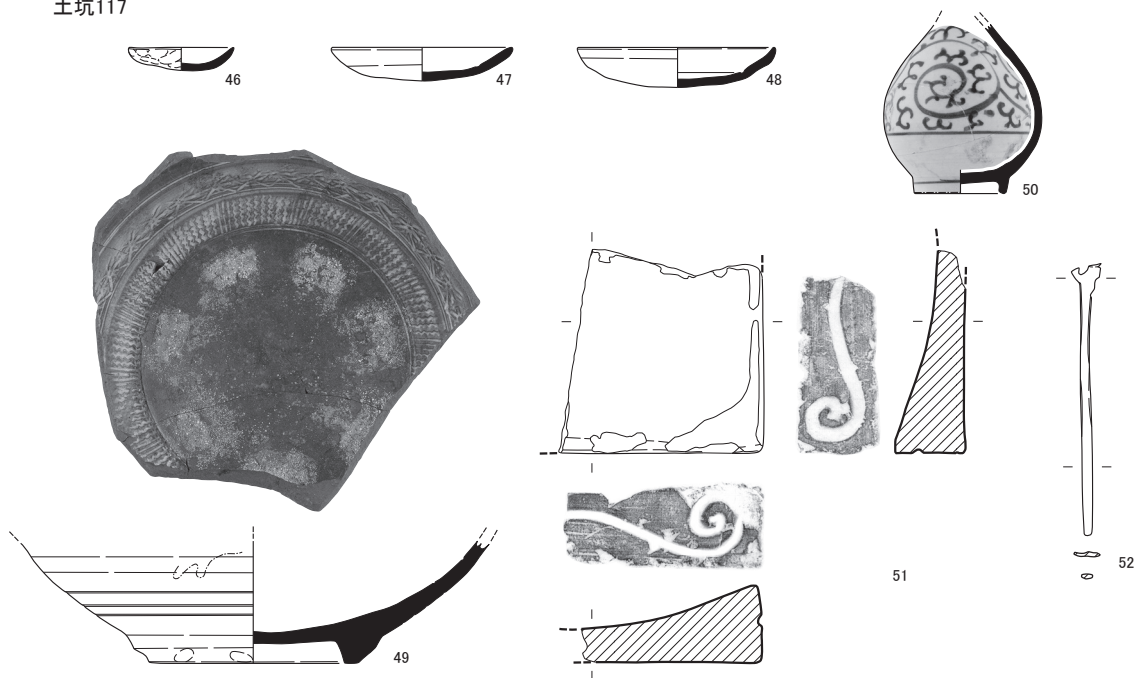


图19 出土遺物1 (1:4)

土坑88



土坑117



第1面検出中

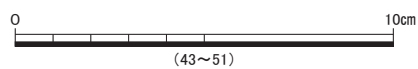


図20 出土遺物2 (1 : 4、1 : 2)

いる。外面にはもみ殻とみられる圧痕が多く認められる。

17は最上層で出土した。炮烙の鉢。口径18.0 cmで口縁端部にヘラで押圧したきざみ目を施している。

18・19は軒丸瓦である。18は外区外縁・珠紋部だけのため文様は不明である。

19は八弁蓮華紋軒丸瓦と思われる。中房に「卍」を配し、外縁に珠紋をめぐらす。瓦当部上面に丸瓦をのせ接合する。接合部裏面は円周方向にナデ。丸瓦部凸面は縦方向のナデ。凹面は布目。側面はケズリによる調整。

土坑 123 (図 19 図版 13 - 3 ~ 5)

20から22は剣頭文軒平瓦。21・22は上部外区に珠文を施す。20・22の平瓦凹面は布目、凸面はオサエとナデ。21は平瓦凹面はナデ。20の面にはヘラ記号がある。

溝 111 (図 19 図版 11 - 1)

23・24は土師器皿 Sh。23は口径6.2 cm、器高1.9 cm。24は口径6.3 cm、器高1.5 cm。24は斜め上方に体部が開く。体部外面はオサエ。口縁部から内面はヨコナデ。

25から31は土師器皿 S。口径8.6 cm ~ 12.0 cm、器高1.8 cm ~ 2.1 cm。体部外面はオサエ体部内面から口縁部はヨコナデ、底部内面はナデによる調整。25・26は口縁部に煤が付着する。

32は瓦質の台付鉢。口径13.4 cm、底径12.4 cm、器高6.1 cm。浅いC字型の体部で口縁端部は直立し丸く収まる。高台は貼付け高台で、高くやや外側に踏ん張る。底部内面はナデ。体部内面から口縁端部はヨコナデ。体部外面は丁寧なヨコのミガキを施している。

33から36は施釉陶器。33は天目碗の底部。底径4.2 cm。ケズリ出し高台である。

34・35は皿。34は口径10.0 cm、底径5.8 cm、器高2.1 cm。底部外面を除き暗いオリーブ黄色の釉を施す。高台端面は釉ハギがみられる。35は口径10.1 cm、底径6.0、器高2.5 cm。灰白色の釉を全面に施す。見込みは鮮やかなオリーブ黄色を呈す。ともに削り出しによる低く小さい高台が付く。

36は古瀬戸の卸目皿。底径7.6 cm。釉は内面のみにみられ、淡い浅黄橙色の釉である。

37・38は輸入青磁。37は皿。底径2.8 cmの平底を呈す。見込みに紋様を施す。38は碗。底径5.8 cm。直立するケズリ出し高台で、高台端部から外面に施釉を施す。見込みと内面に紋様を施す。

土坑 88 (図 20 図版 12 - 2)

39から42は土師器皿 N。口径5.0 ~ 5.6 cm。器高1.3 ~ 1.6 cm。内面は丁寧なナデ仕上げ。外面にはオサエの跡を明瞭に残す。

43・44は土師器皿 S。43は口径10.2 cm、器高1.8 cm、44は口径11.4 cm、器高2.2 cm。ともに内面体部立ち上がり部に明瞭な圈線を有す。44は1か所に小指の先ほどの大きさの耳をつける。内面には漆が全面に付着し、ハケの痕跡も残る。これらの土師器は12Bから13A期にあてられる。

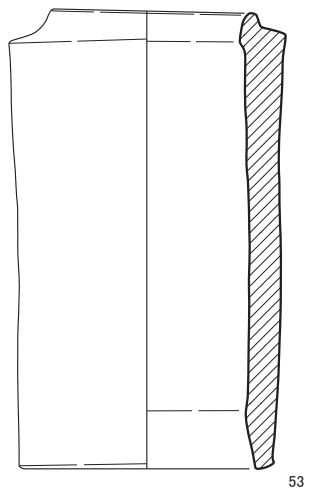
45は九州系の施釉陶器碗。口径11.0 cm、底径3.8 cm、器高6.0 cm。

土坑 117 (図 20 図版 11、13 - 6)

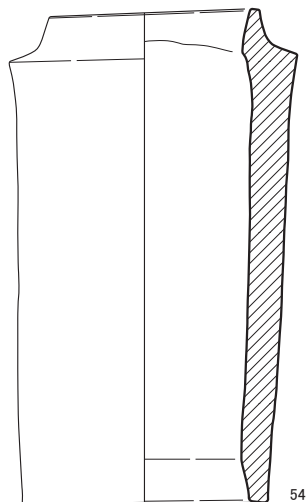
46は土師器皿 N。体部のオサエ痕に布目が残る。口径5.5 cm、器高1.2 cm。

47・48は皿 S である。47は口径9.5 cm、器高1.8 cm。48は口径10.3 cm、器高2.1 cm。14期である。

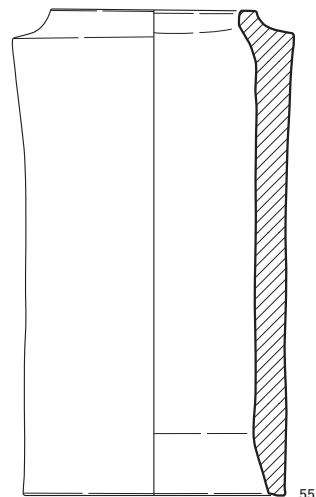
溝102



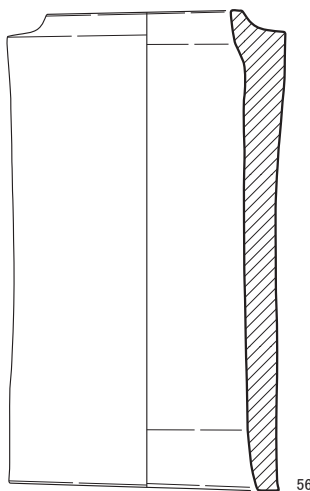
53



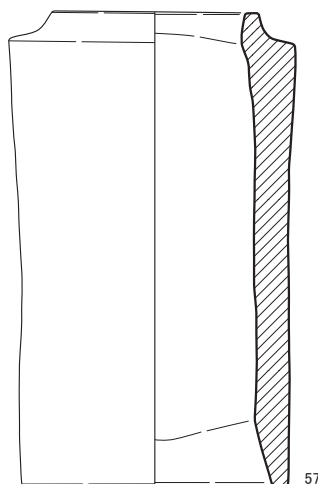
54



55

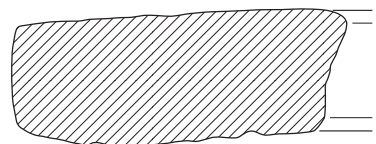


56



57

土坑89



58



图21 出土遺物3 (1 : 4)

49 は、肥前系陶器の鉢底部。いわゆる三島手である。胎土は赤褐色を呈し、見込みには砂目が7か所ある。底部径 10.8 cm。

50 は、肥前系の磁器壺である。底部径 4.8 cm。

51 は塀と思われるが上面はすり鉢状に窪み研磨されたように磨かれている。側面には手彫りで描かれたと思われる唐草が一条ある。最大 4.1 cm。

52 はかんざしと思われる銅製品。現状の長さ 7.3 cm、幅 0.8cm である。

溝 102 (図 21 図版 12 - 1)

53 から 57 は瓦製の土管である。玉縁部の径 10.3 cm～10.8 cm、端部 12.5 cm～14.2 cm、長さ 12.5 cm～14.2 cm、最大径は 14.6 cm～15.6 cm がある。玉縁部は短く 0.7 cm～1.4 cm である。内面には布目を残し、玉縁はナデ、端部内面は横方向にケズル。外面は全面にナデで仕上げている。

土坑 89 (図 21)

58 は石臼。復元直径 37.4 cm、高さ 7.2 cm、重さ 8.5 kg を測る花崗岩製である。軸穴は臼面のほぼ中心に穿たれるとみられる。約半分の破片から復元すると、臼面は軸穴を中心に八分画 6～8 溝式で、溝は浅く幅広に彫られ臼面周縁にまで達している。

59・60 は第 1 面検出時に出土した (図 20 図版 13 - 1)。

59 は軒丸瓦の外区珠文のみの破片である。

60 は犬とみられる土製品。

表4 出土遺物観察表

掲載 番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調・胎土	備考
1	土師器	皿 S	土坑 70				10YR7/4 にぶい橙 長石・石英・チャート含む 密	
2	土師器	皿 S	土坑 70	8.8	2.2		10YR8/2 灰白 長石・石英・チャート含む 密	
3	土師器	皿 S	土坑 70	9.0	2.3		5YR6/6 橙 長石・石英・チャート含む 密	
4	土師器	皿 S	土坑 70	10.7	(2.9)		10YR8/3 浅黄橙 長石・石英・チャート含む 密	
5	土師器	皿 S	土坑 70	11.9	(2.3)		7.5YR8/3 浅黄橙 長石・石英・チャート・赤色粒子含む 密	
6	土師器	皿 S	土坑 70	13.1	3.5		10YR8/2 灰白 長石・石英・チャート・赤色粒子含む 密	
7	土師器	皿 S	土坑 70	13.1	4.1		7.5YR8/3 浅黄橙 長石・石英・チャート含む 密	
8	土師器	皿 S	土坑 70	13.4	3.5		10YR8/2 灰白 長石・石英・チャート・赤色粒子含む 密	
9	土師器	皿 N	土坑 70	11.8	(2.0)		10YR8/4 浅黄橙 長石・石英・チャート・赤色粒子含む やや粗	
10	土師器	皿 Sh	溝 77	5.8	1.6		10YR8/3 浅黄橙 長石・石英含む 密	
11	土師器	皿 Sh	溝 77	7.4	(1.4)		5YR7/6 橙 長石・石英・赤色粒子・含む 密	
12	土師器	皿 S	溝 77	7.8	1.9		7.5YR8/3 浅黄橙 長石・石英・赤色粒子含む 密	
13	土師器	皿 S	溝 77	10.2	(2.4)		7.5YR8/6 浅黄橙 長石・石英・赤色粒子・黒色粒子含む 密	
14	瓦器	椀	溝 77	7.8	2.6	3.2	N4/0 灰、N8/0 灰白 長石・黒色粒子含む 密	
15	青磁	椀	溝 77	16.4	(3.9)		10Y6/1 灰 長石・チャート含む 密	
16	土製品	ふいご	溝 77		(14.5)	6.1	5 mm程の長石・石英・チャート・赤色粒子含む 密	もみ殻の圧痕付着
17	焙烙	火舎	溝 77	18.0	(7.7)		10YR8/3 浅黄橙 3 mm程の長石・石英・チャート含む 密	
18	瓦	軒丸瓦	溝 77	径 (16.0)	長 (2.8)		10YR7/2 にぶい黄橙 長石・石英・チャート含む 密	
19	瓦	軒丸瓦	溝 77	径 (12.0)	長 (12.0)		N4/0 灰 5 mm程の長石・石英・チャート含む 密	
20	瓦	軒平瓦	土坑 123	長 (10.5)	幅 (9.5)	厚 (4.3)	N6/0 灰 3 mm程の長石・石英・チャート・雲母含む 密	
21	瓦	軒平瓦	土坑 123	長 (7.8)	幅 (10.5)	厚 4.9	2.5Y8/1 灰白 長石・石英・チャート・雲母含む 密	
22	瓦	軒平瓦	土坑 123	長 (4.4)	幅 (6.0)	厚 (4.9)	2.5Y8/2 灰白 3 mm程の長石・石英・チャート・雲母含む 密	
23	土師器	皿 Sh	溝 111	6.2	1.9		10YR8/3 浅黄橙 4 mm程の長石、石英・チャート含む密	
24	土師器	皿 Sh	溝 111	6.3	1.5		10YR8/3 浅黄橙 長石・石英・チャート含む 密	
25	土師器	皿 S	溝 111	8.6	2.1		5YR8/4 淡橙 長石・石英・チャート・雲母含む 密	口縁端部にスス付着
26	土師器	皿 S	溝 111	9.8	(1.8)		7.5YR7/6 橙 長石・石英・チャート含む 密	口縁部にスス付着
27	土師器	皿 S	溝 111	10.0	2.0		7.5YR7/4 にぶい橙 長石・石英・チャート・赤色粒子含む 密	
28	土師器	皿 S	溝 111	10.2	2.0		7.5YR8/4 浅黄橙 長石・石英・チャート・雲母含む 密	
29	土師器	皿 S	溝 111	10.8	2.1		7.5YR8/4 浅黄橙 長石・石英・チャート含む 密	
30	土師器	皿 S	溝 111	11.6	(2.1)		7.5YR7/4 にぶい橙 長石・石英・チャート含む 密	
31	土師器	皿 S	溝 111	12.0	1.8		10YR8/3 浅黄橙 長石・石英・チャート・赤色粒子含む 密	

掲載 番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調・胎土	備考
32	瓦質土器	台付鉢	溝 111	13.4	6.1	12.4	N3/0 暗灰 長石・石英・チャート含む 密	
33	施釉陶器	天目碗	溝 111		(1.2)	4.2	(胎) 10YR8/4 浅黄橙 4mm程の長石・チャート含む 密 (釉) 10YR3/4 暗褐	
34	施釉陶器	皿	溝 111	10.0	2.1	5.8	(胎) 2.5Y8/2 灰白 長石・黒色粒子含む (釉) 5Y6/4 オリーブ黄	トチン跡
35	施釉陶器	皿	溝 111	10.1	2.5	6.0	(胎) 10YR8/1 灰白 長石・黒色粒子含む (釉) 5Y7/2 灰白	トチン跡
36	施釉陶器	古瀬戸卸目 皿	溝 111		(1.1)	7.6	(胎) 10YR8/3 浅黄橙 長石・石英・黒色粒子・雲母含む 密 (釉) 2.5Y7/3 浅黄	
37	青磁	皿	溝 111		(1.5)	2.8	(胎) 5Y8/1 灰白 長石・黒色粒子含む 密 (釉) 5Y7/2 灰白	
38	青磁	碗	溝 111		(5.0)	5.8	(胎) N7/0 灰白 長石・黒色粒子含む 密 (釉) 7.5Y5/2 灰オリーブ	
39	土師器	皿 N	土坑 88	5.4	1.3		7.5YR8/4 浅黄橙 長石・石英・チャート含む 密	
40	土師器	皿 N	土坑 88	5.6	1.6		7.5YR7/3 にぶい黄橙 長石・石英・チャート・ 雲母含む 密	
41	土師器	皿 N	土坑 88	5.0	1.4		10YR7/4 にぶい黄橙 長石・石英・チャート含 む 密	
42	土師器	皿 N	土坑 88	5.6	1.3		10YR7/3 にぶい黄橙 長石・石英・チャート含 む 密	
43	土師器	皿 S	土坑 88	10.2	1.8		2.5Y4/1 黄灰 長石・石英・チャート含む 密	
44	土師器	皿 S	土坑 88	11.4	2.2		(胎) 7.5YR4/1 褐灰 長石・チャート含む 密 (漆) 7.5YR4/6 褐	漆付着?
45	施釉陶器	碗	土坑 88	11.0	6.0	3.8	(胎) 5Y7/2 灰白 長石・チャート含む 密 (釉) 5Y4/2 灰オリーブ	
46	土師器	皿 N	土坑 117	5.5	1.2		7.5YR6/4 にぶい橙 長石・石英・雲母・赤色粒子含む 密	体部外面布目
47	土師器	皿 S	土坑 117	9.5	1.8		10YR8/3 浅黄橙 長石・石英・チャート含む 密	
48	土師器	皿 S	土坑 117	10.3	2.1		7.5YR7/3 にぶい黄橙 長石・石英・チャート含む 密	
49	施釉陶器	鉢	土坑 117		(6.5)	10.8	(胎) 2.5YR5/6 暗赤褐 3mm程の長石・チャート含む 密 (釉) 10YR5/1 褐灰	肥前系彫三島
50	磁器	壺	土坑 117		(8.9)	4.8	(胎) 2.5Y8/1 灰白 精良 (釉) 2.5Y8/1 灰白	肥前系染付
51	瓦	塼	土坑 117	長 (10.7)	幅 (9.6)	高 4.1	N4/0 灰 長石・チャート含む 密	
52	金属	かんざし	土坑 117	長 7.3	幅 0.8	厚 0.15		
53	瓦	土管	溝 102	10.4	長 24.3	12.5	(胎) N8/0 灰白 長石・石英・チャート含む 密 (外側) N3/0 暗灰	最大幅 14.6 cm
54	瓦	土管	溝 102	10.6	長 26.3	12.8	(胎) N4/0 灰 長石・石英・チャート含む 密	最大幅 15.2 cm
55	瓦	土管	溝 102	10.8	長 25.7	13.6	(胎) N4/0 灰 長石・石英・チャート含む 密	最大幅 15.0 cm
56	瓦	土管	溝 102	10.3	長 25.0	14.2	(胎) N4/0 灰 長石・石英・チャート含む 密	最大幅 14.7 cm
57	瓦	土管	溝 102	10.7	長 25.1	13.8	(胎) N4/0 灰 長石・石英・チャート含む 密	最大幅 15.6 cm
58	石製品	石臼	土坑 89	長 37.4	幅 19.6	高 7.2		重さ 8.5 kg 花崗岩
59	瓦	軒丸瓦	第 1 面 検出中	径 (13.0)	長 (5.1)		N5/0 灰 長石・石英・チャート含む 密	
60	土製品	人形 (犬) ?	第 1 面 検出中	縦 (3.2)	横 (4.9)	高 (2.2)	10YR7/3 にぶい黄橙 長石・石英・チャート含む 密	

第Ⅳ章 まとめ

本調査は4面で行った。しかし1・2面とした遺構面の出土遺物はほとんど時期差がない。調査成果から当地では江戸時代以降、西洞院通に沿い町屋が形成され、その町屋は、漆喰の池や漆喰で造られ扁平な石で蓋をした溝などの施設を伴うものであった。

今回の調査で最も古い遺構は、土坑 70・溝 77 でともに出土遺物から室町時代前半（8B 期）にあてられる。これらの時期にあたる遺構はほかに検出していない。

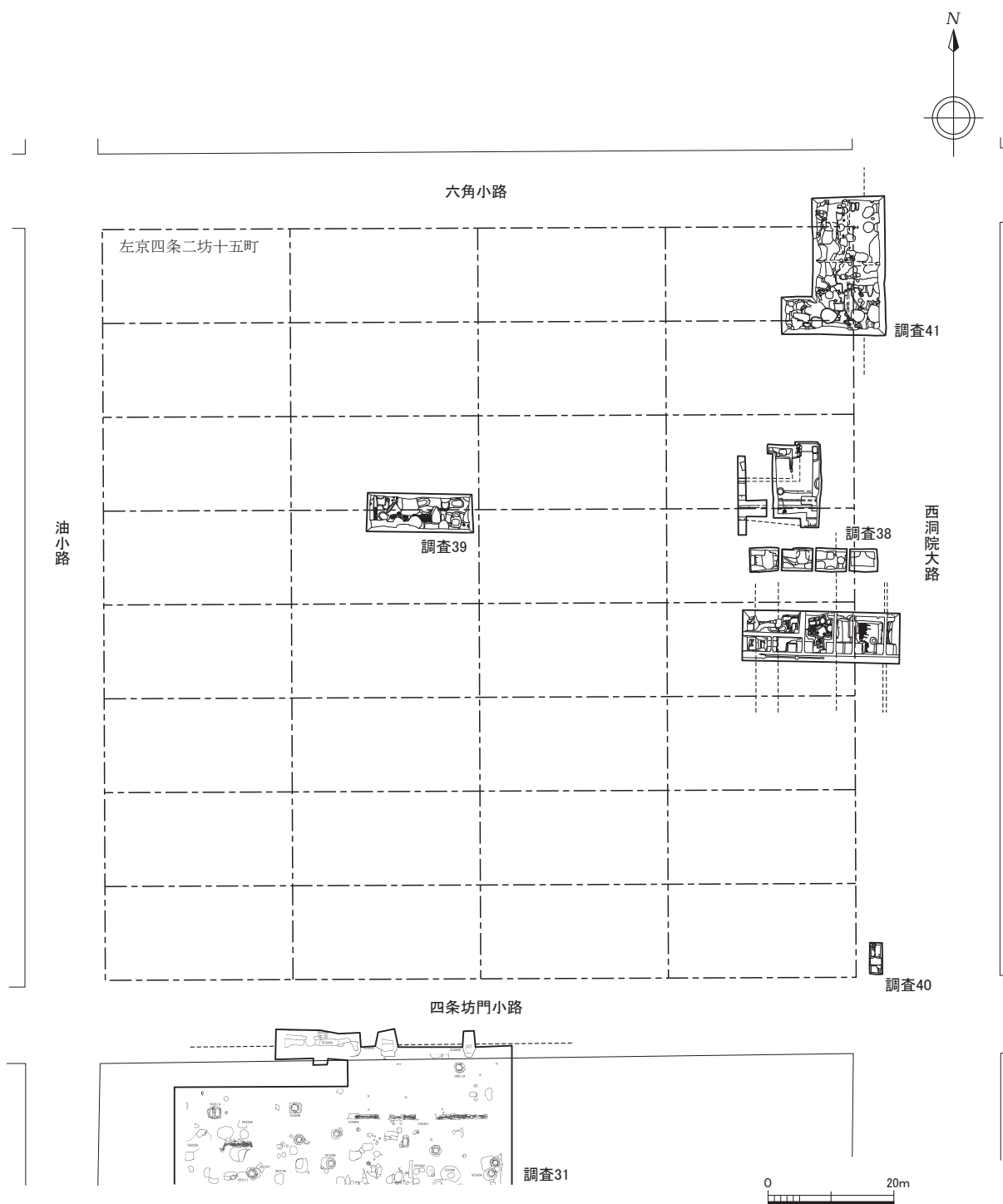


図22 左京四条二坊十五町遺構概略図（1 : 1,000）

これまでの左京四条二坊十五町内の発掘調査では鎌倉時代以前の遺構の検出は非常に少ない。調査 38 では平安時代後期の井戸 1 基、調査 39 では平安時代中期の土坑 1 基と鎌倉時代初期の土坑 1 基、一町の北東隅にあたる調査 41 では平安時代後期の土坑 1 基の検出にとどまっている。今回の調査でも平安時代の遺構は確認していない。遺物では平安時代の緑釉陶器の微片や、鎌倉時代と思われる瓦器や土師器がわずかに出土しているに過ぎない。

溝 77 について

平安京条坊復元の西洞院大路西築地推定心から約 10m 西で溝 77 を検出した。検出面での幅 3.2m、深さ 1.9m を測る南北方向の溝である。調査範囲が狭いため溝になるかは不明であるが、北に接する調査 38 (第Ⅱ章—2 既往の調査 以下同じ) でも同規模の南北方向の溝 SD28 を確認している。

戦国時代、当該地には「下京惣構」が築かれていた。油小路から四条坊門小路、西洞院大路を北上し三条まで構があったとされている。調査 31 では四条坊門小路の南に沿い東西方向の堀跡を検出し下京惣構の壕に推定している (図 22)。南北方向の構はこれまでの調査で確認はしていないが、溝 77 と調査 38 検出の SD28 を下京惣構の壕に推定することもできる。

溝 111 について

調査 38 で溝 SD22 を検出した。16 世紀前半から中頃の遺物が出土しており、左京四条二坊十五町の地に本能寺が移転する直前に整地した西洞院川に推定している。西肩を確認しているが、東肩は調査区外になるため検出していない。

今回の調査で確認した溝 111 の西肩は Y=-22,364 ライン付近で検出しており、SD22 の西肩の南進部分に合致する。このことから当初溝 111 を西洞院川と想定した。調査の進捗に伴い東側肩部の立ち上がりが確認でき溝 111 は幅 7 m であることが判明した。また東肩から約 1 m の Y=-22,356 ラインから東側に再度落ち込む溝 140 を確認した。調査 41 では西洞院川の西肩を Y=-22,360 ライン付近で検出している。調査 40 では、Y=-22,357 ラインに調査区のある中心があるが、ほぼ西洞院川の中にあたる。左京四条二坊十五町以外での西洞院川西肩の確認は 1982 年調査の左京二条二坊十四町で検出されている。この時の検出座標は Y=-22,368 ラインである。このように西洞院川の西肩の検出位置は出入りがある。大路に伴う河川なので直線的に造られていたと思われるが、検出例が少なく調査事例の積み上げを待つしかない。

溝 111 を西洞院川とは別の遺構と考えて溝 140 を西洞院川に想定すると、2020 年調査の左京二条三坊四町で確認した東肩が Y=-22,347 ラインにあり、西洞院川の川幅は 9 m になる。また江戸時代には町名があらわす生簀があったとされている。溝 111 出土遺物からは本能寺の変後完全に埋められている。

木舞について

南北方向の溝 111 の東肩に沿って木舞とみられる木と竹を組んだ製品を検出した。出土状況は東から西に倒壊した状態に見れる。しかし東肩上に土塀を設置した痕跡はコンクリート基礎の直下になるため確認できなかった。また 1 m ほど東に溝 140 があり土塀を構築したとは思われない。

付近からは木舞に塗る壁土とみられる痕跡は確認していない。木舞は壁土を付けたままでの移動は大変な重量になるため不可能に近いが木組みだけなので投棄することは可能であったと思われる。また、木舞の組み方などから簡易なものであったとの教授をうけた。

木舞の材について樹種同定と年代測定、木舞の包含されていた褐灰色泥砂層の花粉分析をパリオサーヴェイ株式会社に依頼し実施した。詳細は附章に報告を掲載した。

樹種の分析結果はクリ・スギ・タケで、花粉分析ではイネ科をはじめソバ・ベニバナなどの栽培種があり、周辺での栽培・利用を推定している。また放射性年代測定の歴年代は 15 世紀中頃という結果を得た。

調査地は西洞院大路の西側に面したほぼ一町の中心の地点にあたる。

明智光秀方の武将とされる者が本能寺の変から 58 年後の江戸時代にあらわした記録である「本城惣右衛門覚書」では西洞院大路に出て橋の際から門を入ったとの記述があり調査地周辺に本能寺の門が想定できた。洛中洛外図屏風によれば四条坊門小路は小路南側に下京惣構に伴うとみられる塀が描かれ、六角小路との間には西洞院川に橋が架けられている。その西側に本能寺の瓦葺の建物 2 棟と板葺の建物が描かれている。一町の中心にあたる調査地に本能寺の門などを想定することができた。

調査結果からは今回の調査では本能寺の変を想定できる焼土層、焼けた瓦などは検出されず、出土遺物でも「𪚩」銘の瓦の出土もなかった。溝 70 は本能寺造営前には埋められているが、北に接する調査 38 での調査成果とは大きく異なっている。洛中洛外図屏風では本能寺の瓦葺の建物の東側と南側は雲の下であるが空地とみることができる。花粉分析の結果では周辺でのソバや稲の栽培を推定している。

参考文献

京都市「桃山の開花」『京都の歴史』第 4 巻 学芸書林 1969 年

高橋康夫「京都中世都市史研究」『第 4 章 戦国動乱と京の都市空間』思文閣出版 1983 年

山本雅和「中世京都の堀について」『研究紀要』第 2 号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

山田邦和「京都都市史の研究」『第二部 中世都市京都の成立と展開』吉川弘文館 2009 年

平安京調査会「6 左京二条二坊(4)」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984 年

株式会社文化財サービス「平安京左京二条三坊四町跡発掘調査報告書」株式会社文化財サービス 2020 年

附章 平安京左京四条二坊十五町跡・ 本能寺城跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡（京都市中京区池須町所在）より出土した木舞の一部とされる木製品の樹種同定・年代測定と、堀内堆積物の花粉分析を実施する。

1. 試料

樹種同定試料は、木舞の一部とされる3点（資料①、資料②、資料③）である。年代測定には資料①を用いる。花粉分析試料は、堀内の埋積物1点（7区 SD111）である。

2. 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

試料の表面に付着した泥などの不純物を削り落として50mgに調整する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、14Cの計数、13C濃度（13C/12C）、14C濃度（14C/12C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。 $\delta^{13}C$ は試料炭素の13C濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線はIntCal20 (Reimer et al.,2020)である。

（2）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸

9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本をはじめ、Erdtman(1952,1957)、Faegri&Iversen(1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（3）樹種同定

生材は、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。ガムクロラルで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

（1）放射性炭素年代測定

結果を表1、図1に示す。試料の保存状態は良く定法での分析処理が可能であり、測定に必要なグラフィットは十分得られている。資料①の同位体補正を行った値は、 430 ± 25 BPである。暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に

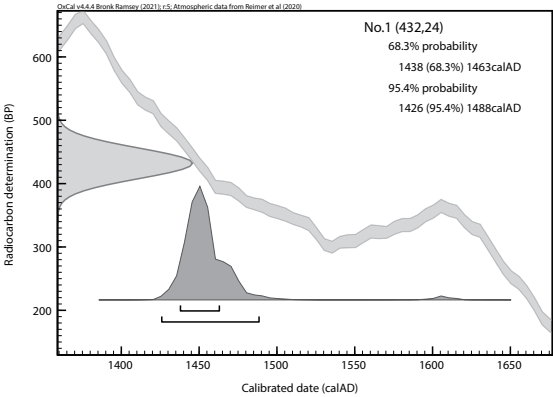


図1 暦年較正結果

表 1. 放射性炭素年代測定結果

資料	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ 13C (‰)	暦年較正年代													Code No.	
					年代値														
					σ	cal	AD	1438	-	cal	AD	1463	513	-	488	calBP	68.3		
資料①	木材 クリ	AAA (1M)	430 ± 25 (432 ± 24)	-25.40 ± 0.76	2 σ	cal	AD	1426	-	cal	AD	1488	525	-	462	calBP	95.4	YU- 15074	pal- 13900

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568 年を使用。
2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であることを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の 68.2% が入る範囲）を年代値に換算した値。
4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。
5) 暦年の計算には、OxCal v4.4 を使用
6) 暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。
7) 較正データセットは、IntCal20 を使用。
8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が 68.2%、2 σ が 95.4% である

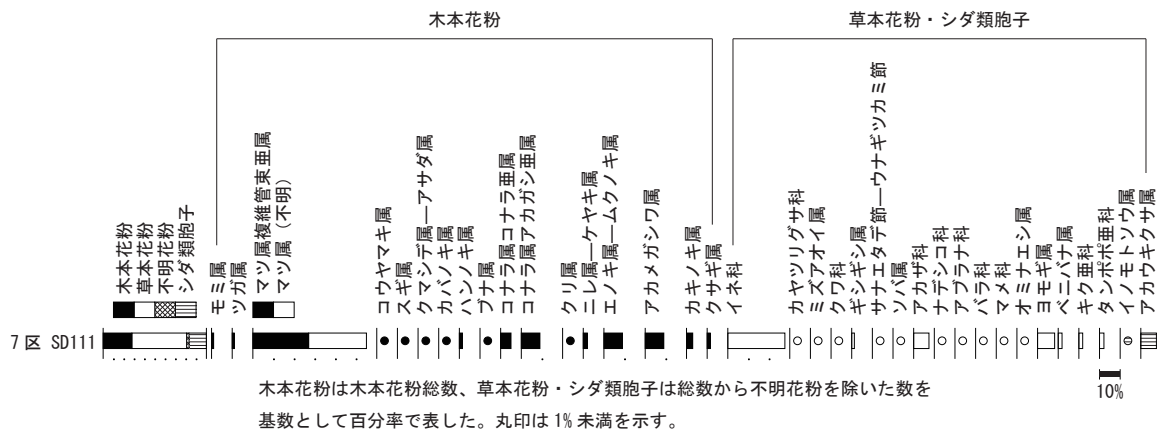


図1 暦年較正結果

近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20 (Reimer et al., 2020) を用いる。2 σ の値は、c a l A D 1426～1488 である。

(2) 花粉分析

結果を表2、図2に示す。花粉化石の検出量、保存状態ともに普通である。草本花粉が多いのが特徴である。草本花粉はイネ科が多く、イネ科の中にはイネ属の花粉化石を含む。次いでアカザ科、ヨモギ属の花粉化石が多い。栽培種は、イネ属のほか、ソバ属、ベニバナ属が確認される。木本花粉は、マツ属の割合が多く、全体の半数以上を占める。その他、コナラ亜属、アカガシ亜属、エノキ属—ムクノキ属、アカメガシワ属などを伴う。

(3) 樹種同定

結果を表3に示す。資料①はクリ、資料②はタケ亜科、資料③はスギに同定された。以下に検出された分類群の植物解剖学的所見を述べる。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1～10細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有

表2 花粉分析結果

種 類	7区
	SD111
木本花粉	
モミ属	2
ツガ属	2
マツ属複雑維管束亜属	54
マツ属 (不明)	56
コウヤマキ属	1
スギ属	1
クマシデ属—アサダ属	1
カバノキ属	1
ハンノキ属	3
ブナ属	1
コナラ属コナラ亜属	10
コナラ属アカガシ亜属	18
クリ属	1
ニレ属—ケヤキ属	4
エノキ属—ムクノキ属	18
アカメガシワ属	18
カキノキ属	6
クサギ属	3
草本花粉	
イネ科	194
カヤツリグサ科	3
ミズアオイ属	1
クワ科	6
ギンギン属	9
サナエタデ節—ウナギツカミ節	1
ソバ属	2
アカザ科	52
ナデシコ科	5
アブラナ科	2
バラ科	4
マメ科	2
オミナエシ属	1
ヨモギ属	58
ベニバナ属	13
キク亜科	13
タンポポ亜科	15
不明花粉	
不明花粉	17
シダ類孢子	
イノモトソウ属	1
アカウキサ属	53
他のシダ類孢子	67
合 計	
木本花粉	200
草本花粉	381
不明花粉	17
シダ類孢子	121
合計 (不明を除く)	702
その他	
鞭虫卵	1

し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・タケ亜科 (Bambusoideae)

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

4. 考察

平安京における古植生に関する調査は、連続した堆積物で
の分析は存在しないが、包含層や遺構を対象にした花粉分析、植物珪酸体分析、種実分析が行われており、断片的ではあるが、古植生変遷に関する情報が得られている。これらの結果をみると、平安時代以降、栽培植物を含む草本類の増加が確認され、平安京造営のための開発に影響していると考えられている。その傾向は10世紀以降にさらに顕著になるほか、栽培種の種類数も増える傾向にある。また、木本類は平安時代の初期はアカガシ亜属やコナラ亜属などの広葉樹が比較的多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属などの針葉樹を伴う組成であったものが、時代を追う毎にマツ属が漸増し、12世紀頃には高率となる（パリノ・サーヴェイ株式会社,2008など）。今回の7区 SD111堀内埋積物の花粉分析結果は、京都市内の中世以降の花粉分析結果とも類似する。

イネ科をはじめ、アカザ科、ヨモギ属など草本花粉の多産は、人為的な植生攪乱が頻繁に及んでいたことを意味し、周辺は開けた場所であったと推定される。また、栽培種をみると、イネ科花粉中には栽培種のイネ属が含まれるほか、ソバ属、ペニバナ属を含むことから、周辺での栽培・利用が推定される。

木本花粉では、マツ属が多い。マツ属は生育の適応範囲が広く、極端な陽樹であることから二次林の代表的な種類である。随伴するコナラ亜属やアカメガシワ属も二次林を構成する種類である。アカガシ亜属は常緑広葉樹林の主要構成要素であり、極相林を構成するが、中にはアラカシなど二次林に多く見られる種類を含む。エノキ属やムクノキ属は、明るい林地を好み、河川沿いや林縁などに多く生育する。今回検出された花粉化石は、山地の縁辺部等に二次林を構成していた種類に由来すると思われる。なお、マツ属は成長が早く、樹形が美しいことから、京都では庭園内や護岸目的で多く植栽されていたとされており（飛田,2002など）、植栽の可能性はある。一方、マツ属は、風媒花の中でも特に花粉生産量が多く、遠くまで飛散する。また、花粉外膜は分解に対する耐性も強い。このことから、当時の森林中のマツ属の割合は、花粉化石の割合ほど多くなかったとみられる。このように、生産量が多く飛散能力に優れる花粉化石が実際の植生よりも多くなる傾向は、花粉化石の堆積機構に関してしばしば論じられる（Faegri & Iversen,1989など）。

一方、木舞の樹種は、常緑針葉樹のスギ、落葉広葉樹のクリと、タケ亜科（厳密に言えば樹木ではない）が確認された。これら3種類の特徴として、割裂性が良く、薄く裂けるため、平たく長い部材が得やすい特徴がある。このように、検出された種類は、いずれも木舞として加工するには適

表 3. 樹種同定結果

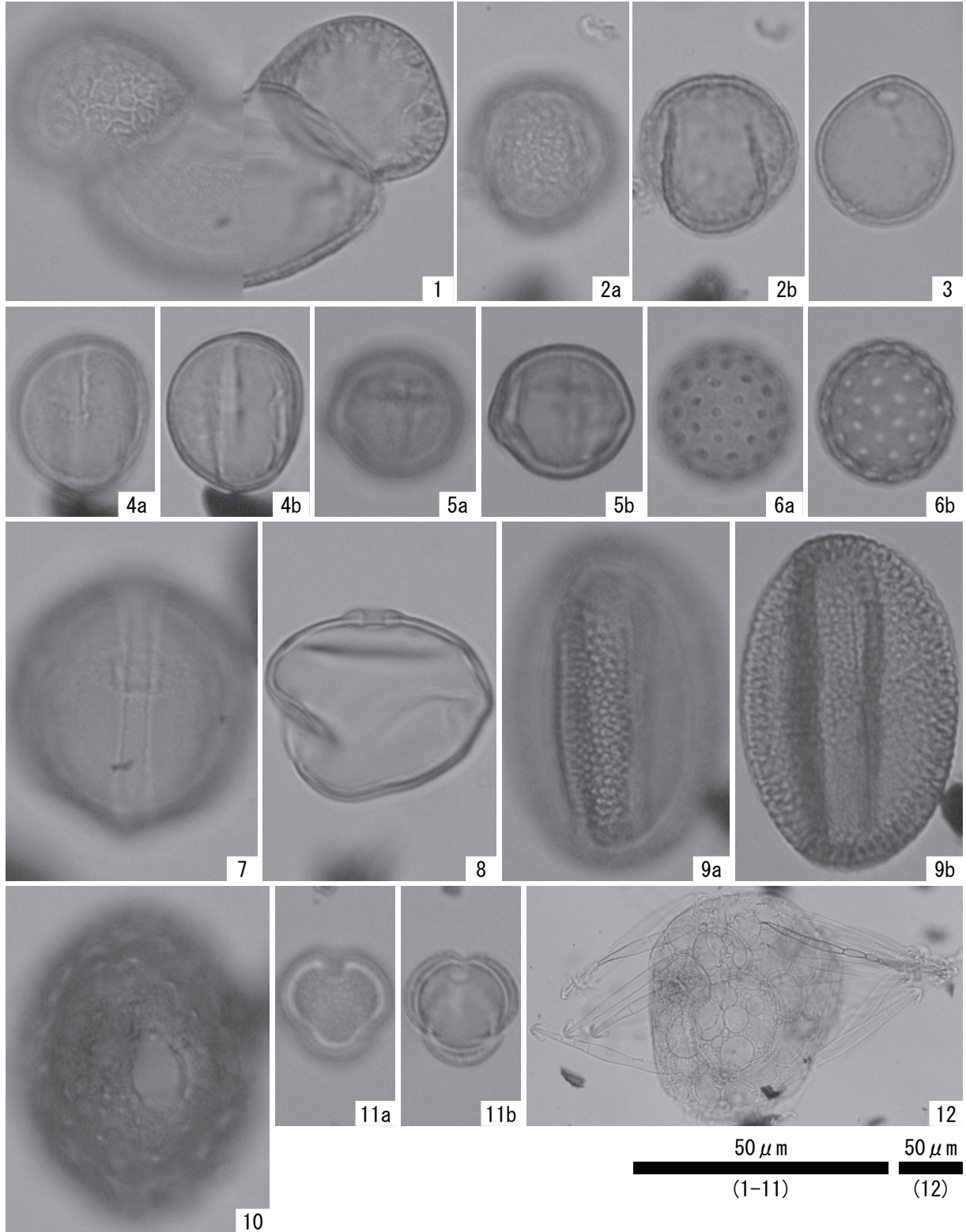
試料名	種類	備考
資料①	クリ	15C
資料②	タケ亜科	
資料③	スギ	

した種類である。また、放射性年代測定結果を歴年代に換算すると、15世紀中頃となる。

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- Erdtman G., 1952, Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I). *Almqvist & Wiksells*, 539p.
- Erdtman G., 1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II). *Almqvist & Wiksells*, 147p.
- Fægri K. & Iversen J., 1989, Textbook of Pollen Analysis. *The Blackburn Press*, 328p.
- 藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島産植物花粉図鑑. *アクアコーラル企画*, 155p.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴ⅠⅡ(図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集, 91p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 2008, 付章 自然科学分析. 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-7 平安京右京六条一坊三町跡, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 39-62.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62, 1-33.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Stuiver M., & Polach A.H., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ¹⁴C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 飛田範夫, 2002, 日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会, 435p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

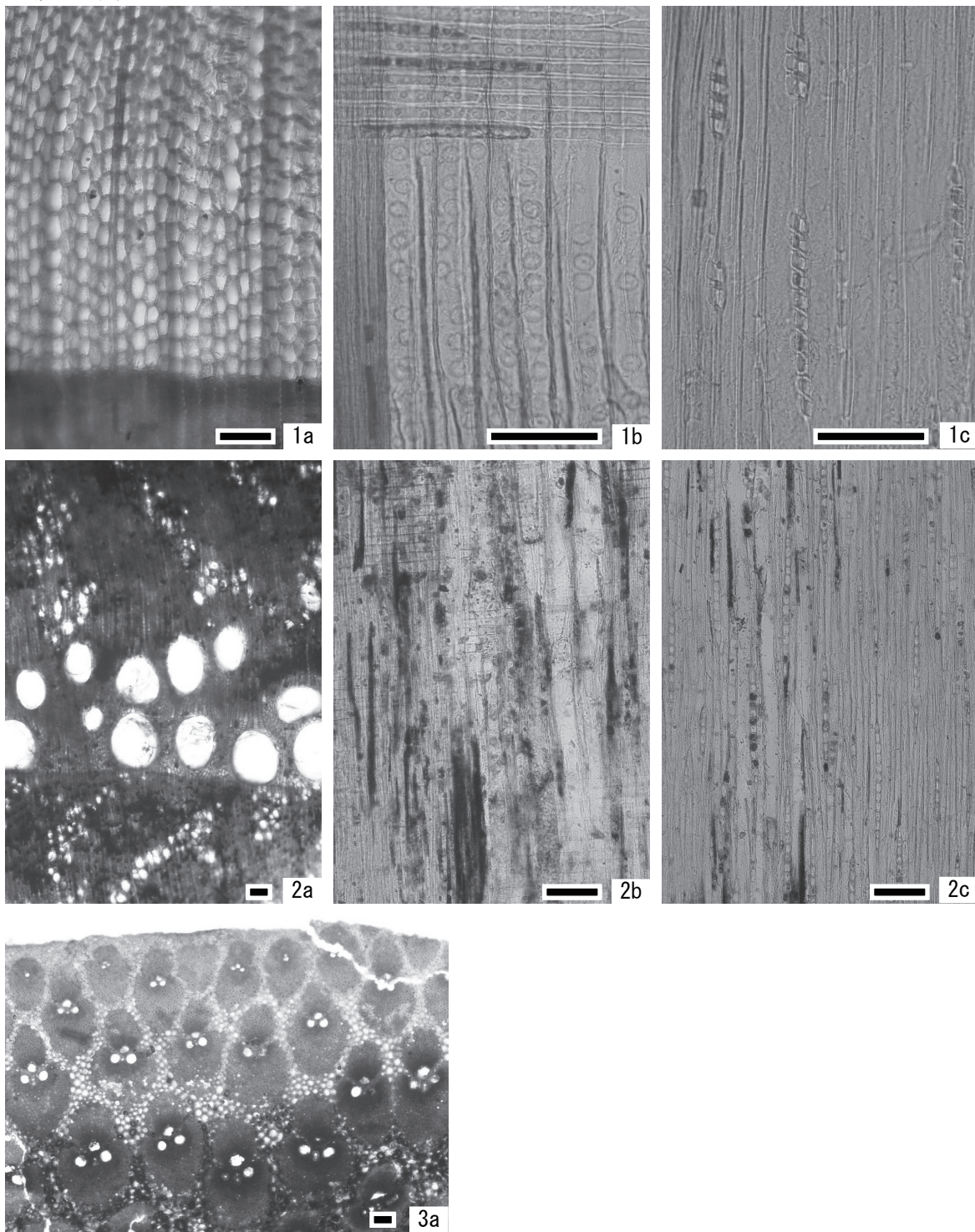
図版1 花粉化石



1. マツ属(7区;SD111)
3. エノキ属—ムクノキ属(7区;SD111)
5. アカメガシワ属(7区;SD111)
7. カキノキ属(7区;SD111)
9. ソバ属(7区;SD111)
11. ヨモギ属(7区;SD111)

2. コナラ属コナラ亜属(7区;SD111)
4. コナラ属アカガシ亜属(7区;SD111)
6. アカザ科(7区;SD111)
8. イネ科(7区;SD111)
10. ベニバナ属(7区;SD111)
12. アカウキクサ属(7区;SD111)

図版2 木材



1. スギ(資料③)
2. クリ(資料①)
3. タケ亜科(資料②)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

図 版



1. 第1面西（垂直写真）



2. 第1面東（垂直写真）



1. 第2面西（垂直写真）



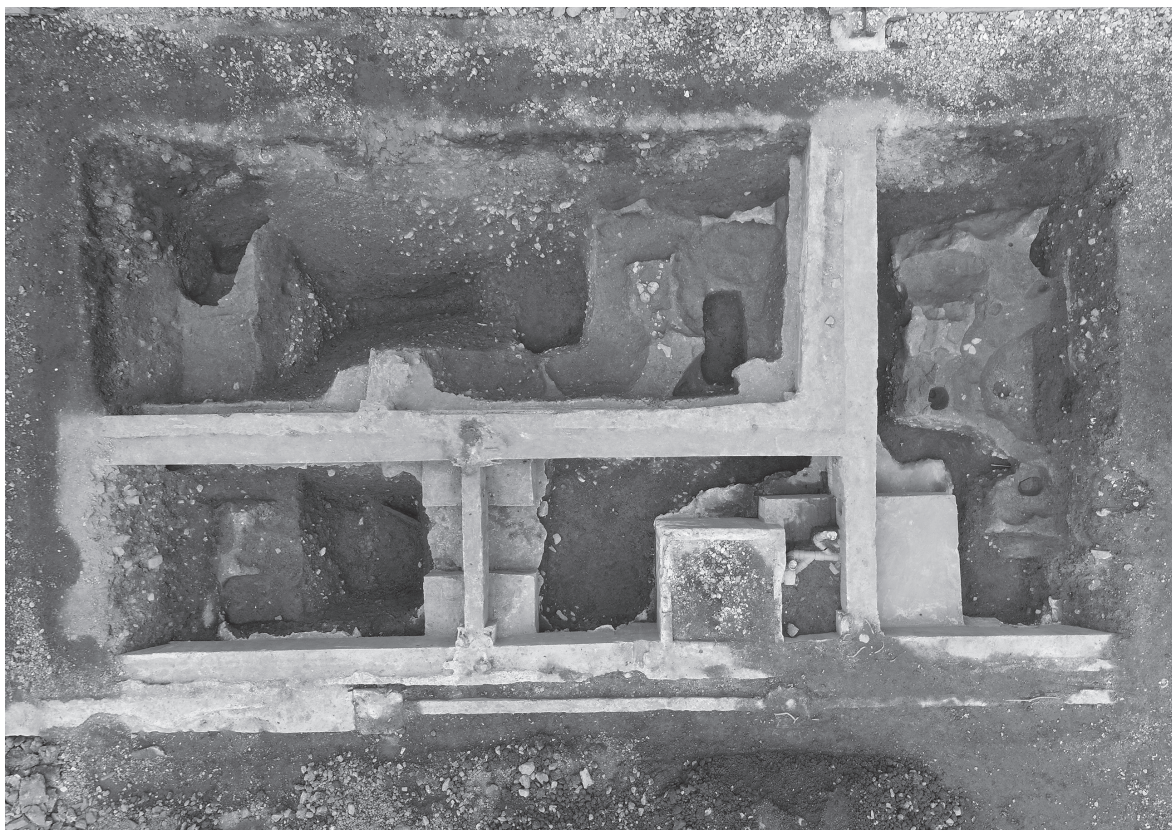
2. 第2面東（垂直写真）



1. 第3面西（垂直写真）



2. 第3面東（垂直写真）



1. 第4面西（垂直写真）



2. 第4面東（垂直写真）



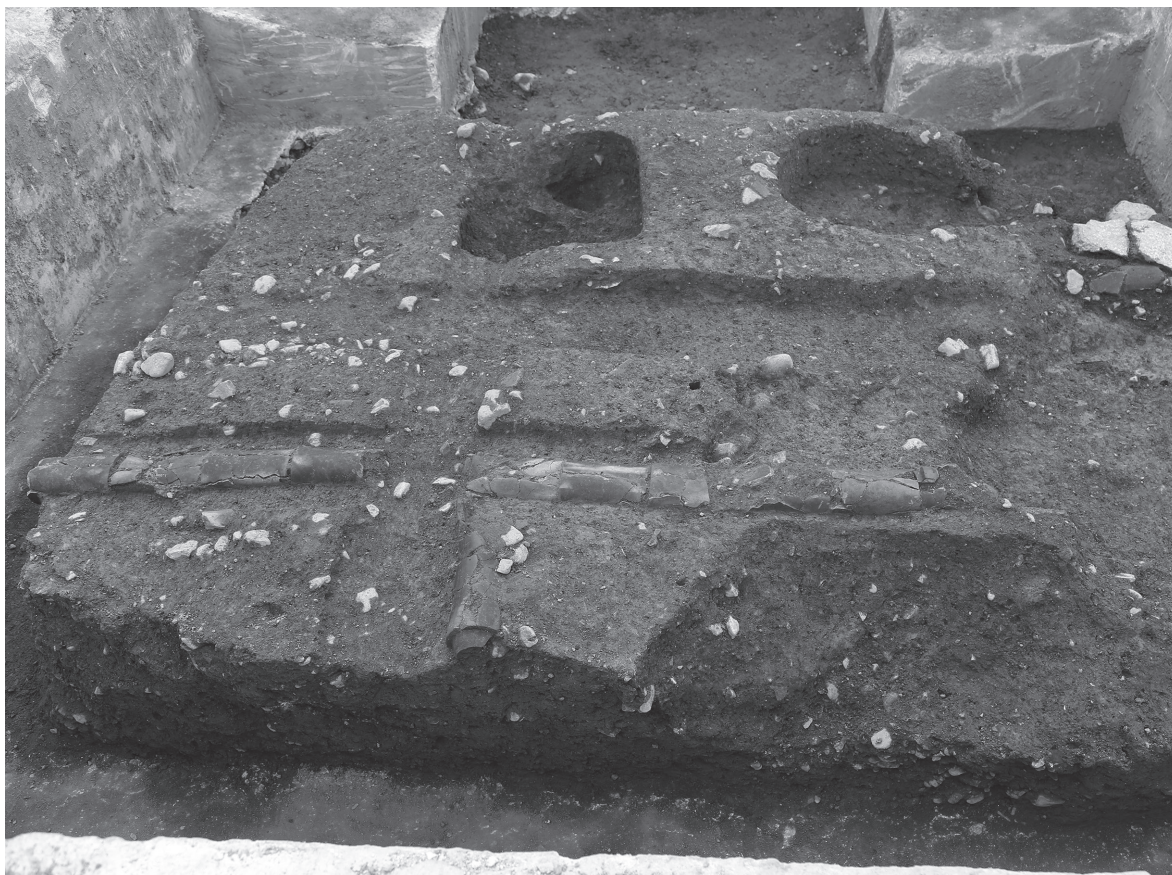
1. 第1面 溝98・137・榊89 (北から)



2. 第1面 溝98・137・榊89 (西から)



3. 第1面 溝98・137・榊89 蓋石除去後 (西から)



1. 第2面 溝102・107 (北から)



2. 第2面 溝102・107 (東から)



3. 第2面 土坑95・112 (北から)



1. 第3面 井戸127 (南から)



2. 第3面 井戸127断割 (南から)



1. 第4面 土坑70 (南から)



2. 第4面 溝77 北壁断面 (南から)



1. 第4面 溝111 木舞検出状況（北から）



2. 第4面 溝111西肩断面（南から）



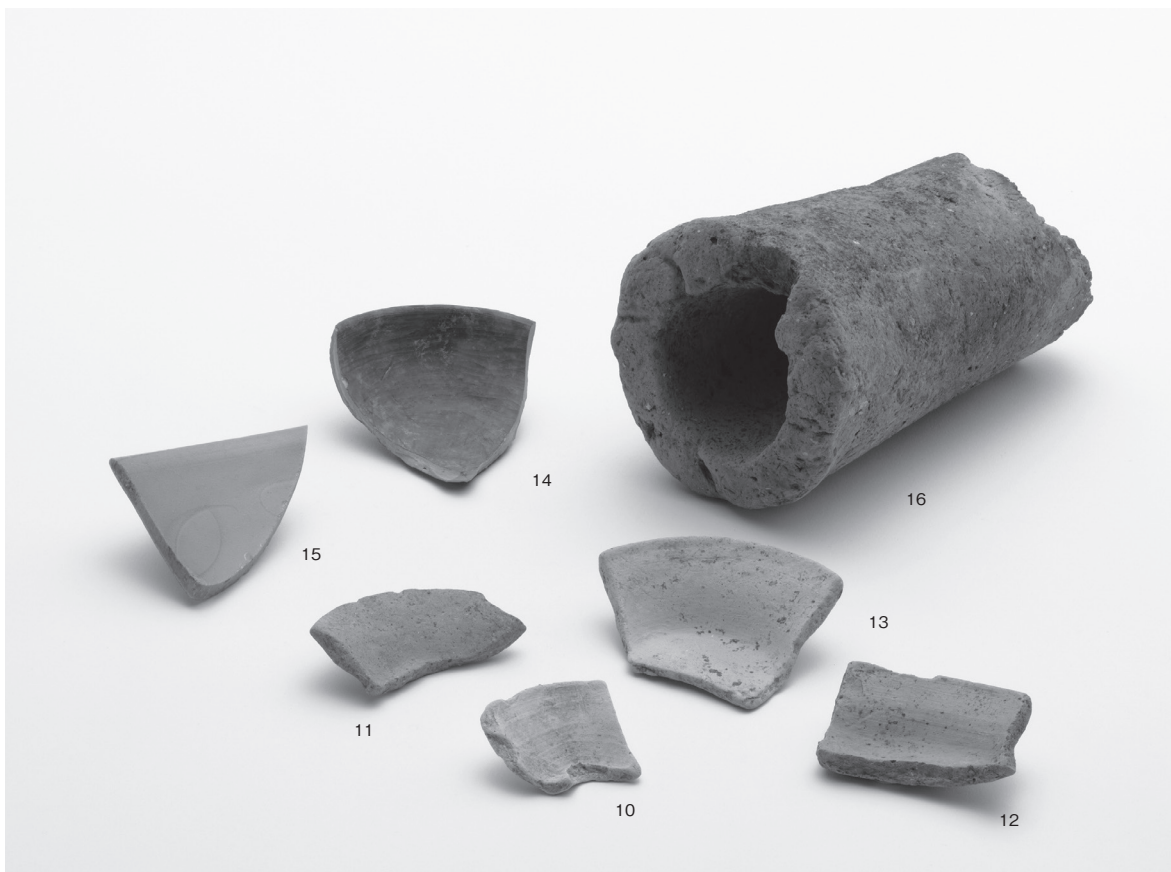
3. 第4面 溝111東肩断面（南から）



4. 第4面 溝111南北断面（東から）



1. 出土遺物 1 土坑 70



2. 出土遺物 2 溝 77



1. 出土遺物 3 溝111



2. 出土遺物 4 土坑117 51側面 1

3. 出土遺物 5 土坑117 51側面 2



4. 出土遺物 6 土坑117



1. 出土遺物 7 溝102



2. 出土遺物 8 土坑88



1. 出土遺物9 第1面検出中



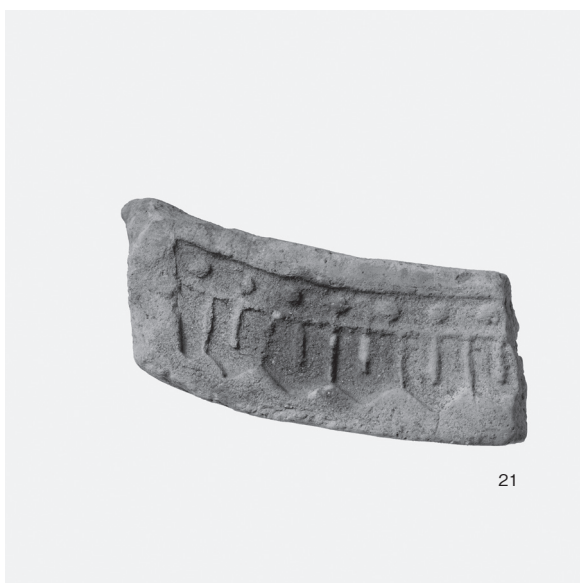
2. 出土遺物10 溝77



3. 出土遺物11 土坑123



4. 出土遺物12 土坑123



5. 出土遺物13 土坑123



6. 出土遺物14 土坑117

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょうにほうじゅうごちょうあと・ほんのうじじょうあととはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	菅田薫 早見由槻 野地ますみ							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2022年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょうしじょう 平安京左京四条 にほうじゅうごちょうあと 二坊十五町跡・ ほんのうじじょうあと 本能寺城跡	きょうとしなかがょうく 京都市中京区 にしのとういんどおりろつかく 西洞院通六角 さが いけすちょう 下ル池須町415 他	26100	1 468	35度 00分 24秒	135度 45分 18秒	2021年 10月11 日 ～ 11月29 日	200㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡	都城・城跡	室町時代前半		溝 井戸 土坑		土師器 瓦質土器 施釉陶器 輸入陶磁器 土製品 瓦		・本能寺城以前の時期になるとみられる溝を確認した。下京惣構の堀の可能性はある。 ・本能寺の時期にあてられる遺物を含む土器で埋められた溝中から木舞とみられる木組みが出土した。 ・江戸時代以降は、西洞院通りに沿い町屋が形成されていた状況が明らかとなった。
		室町時代後半～江戸時代		溝 土坑 柱穴		土師器 瓦質土器 施釉陶器 輸入陶磁器 土製品 瓦石製品 金属製品 木製品（木舞）		

文化財サービス発掘調査報告書 第22集

平安京左京四條二坊十五町跡・
本能寺城跡発掘調査報告書

発行日 2022年3月31日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961